
知らない天井だ.....。

黒裂 那之

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知らない天井だ……。

【著者名】

黒裂 那之

N4834W

【あらすじ】

「勇者様、よぐだ来て下わつました」
……さて、状況を整理しよう。

隣には親友（仮）。周りには武器を構えた兵士共。目の前にはこの国の姫様（仮）。そしてここは異世界？

勇者なんて俺は拒否する。いかにもめんどくさそうだし。
というわけで元の世界に……え、戻る方法がわからない?
しかも秘密を知ったからには俺を殺す……？ ふざけんなよ。
いいただろ。そっちがその気ならこっちは乗つてやる。

勇者だらうが魔王だらうがどつかの国だらうが、俺が全部、滅ぼしてやる。

原作者註記（前書き）

初投稿です。頑張って書いていきたいのとよりじくお願ひします。

あと、プロローグなのでかなり短いです。

星が綺麗だ。

輝く夜空を見上げて、少女はそう思つた。

「レンカ様、魔法陣の用意が整いました」

と、すぐ目の前からそつ聞こえて、レンカと呼ばれた少女は視線を前へと向ける。

そこには、俗にメイドと呼ばれる格好をしている者がいた。この人の名前は、主であるお母様でさえ知らない。

「ありがとうございます、メイドさん」

「レンカ様の命令ですので」

田の前に広がるこの魔法陣を用意した理由は、たったひとつ。勇者と呼ばれるこの国の救世主をここに召還することだ。

「騎士の皆さまは、召還に備えて準備をしてください」

そしてその際には、失敗すればなにが起こるのかまったくわからぬ。

故に、いつでもなにが起きたも良いよつて準備を施す。

「勇者召還、頑張って下さい」

「絶対に成功させて見せます」

「そうですか。期待していますよ、レンカ様」

一度……一度……三度、深呼吸をその場でする。

そして私は覚悟を決めて、魔法陣の近くまで歩いていく。

……絶対に、成功させる。

私は腰にかけてあつた短剣を抜き取り、それで左手の親指の表面を切り裂く。そして血が指から溢れ、私は滴るそれを魔法陣へと躊躇なくかけた。

瞬間、空気が変わる。魔法陣の魔力が激しく乱れて溢れだす。

その魔力をなんとか維持しながら、私は詠唱を開始する。

……長い長い時間の中、ついに詠唱は終了し、突如魔法陣の中央に黒い渦が発生した。

「やった……成功しました……！」

そしてその渦から……鈍い光を放ちながら、なぜか一人の少年が姿を現した。

第一話 最悪な誕生日（前書き）

基本不定期更新ですが、できるだけ必ず一ヶ月以内には投稿していきます

第一話 最悪な誕生日

今日は俺の誕生日だった。

いいことが起こるといいなあ、とか。
彼女がいればなあ、とか。

まあいろいろ思つたわけですよ、はい。
結局、親友（仮）と男だけの寂しい空間で祝つてもらつてたんだ
けどね。

……でも、や。

まさかこんなことになるとは思わないでしょ普通。

異世界召還とか…………。

ケーキに入れた蠟燭の火を消すため、部屋の電気を消して前へに
向き直つた。

特に装飾など無いシンプルなショートケーキが蠟燭の火に照らさ
れてよく見える。

「ほら、さつさと火を消せよ」

「くいへい」

蠟燭の数は18。受験を控えているんだけど、こんなことしてて

もいいんだろうか。

……まあいいよね。うん。深く考えなこよひじてやる。

適当に息を吹きかけ、全ての明かりを消し去つてやる。

「おめでとさん」

「男に祝われても大して嬉しくねえ……」

そんな俺の言葉を無視して、この無駄にイケメンな親友（仮×自称）は部屋の電気を再びつけようと……

……あれ？

「早くつけるよ」

「いや……もうつけてるんだが……」

「なんだよ。停電か？ 今時珍し……」

俺の言葉は、途中で止まる。

……え。だつてさ……これ、なに?……。

「? だつした?」。急に黙つ……」

お。どうやらこいつもそれを見つけたようだ。

それじゃ、いくよ? セーのつ

「「ブラックホール?」」

そう。なぜか田の前に黒い渦が俺たちを吸い込もうと頑張つていたのである。

もうなんづラックホール（たぶん）なんて引力に逆らえるはずもなく

なく

そのまま仲良くその中に吸い込まれましたとわ

「 つ」

「じじだ……じじ。」

こういつときは十分に警戒しないと後々後悔するからな、油断はしない。

まつたく意味のわからない状況の中、いつも護身用に上着の内側に入れて持ち歩いている『ある物』に手をかけておく。

「助かつた……のか？」

親友（名前なんだつけ。忘れた。名乗るまでこのまま呼ぶか）が隣で声を上げるが、完全無視してやる。

……なんだこの状況。

隣には親友（仮）。周りには武器を構えた兵士共。田の前には微妙に豪華な服を着ている美少女。

……うん。もう大体予想できる。だってテンプレじゃん、これ。はあ……。そうだな、この美少女になに言われるか……予言してやる。

『勇者様、よくぞ来て下さいました』だ

「勇者様、よくぞ来て下さいました」

ほり、な？

「勇者……？」

バカ発見。

あ？ 今この状況は使えるかも。
うん。つていうか利用しよう。

「ところで、勇者様はどういこいつです。間違いありません。俺が
保障します」

親友（仮）を指差して、言こきつてやつた。

ふはw。まあ頑張れや親友（仮）。俺は勇者なんて嫌だからな。
「え？ おいどつことだ」「
「知らね。ほら勇者様～、その姫様（テンプレなら間違いない）
が君と話したがってるよ～」

「え？ と……もひ、ようじいんじょつか？」

ほり、早く続きを聞いてやれよ……と親友（仮）の背中を叩いてや
る。

不満そうな顔を向けられるが無視。男がやつてもキモいだけです
から。

さて……俺は状況確認でもするとしようつか。

「それであの……俺たちはゼリフでござなと」ルル「…………？」

あ。そりこや俺、靴履いてねえ。ゼリフみよ。

「私があなたたちを……勇者として召還したからです」

まあゼリフくんはゼリフでもなるか。

「？？ どうこいつ」とだ?「..」

あー、暇だ。ん、周りの騎士さん達も随分暇そうにな~。うむ、仲間だ!

「魔王と呼ばれる魔物の王を倒してもうつべへ、私たちが異世界からあなたたちを呼びだしたんです」

まああれだ。姫様でも観察するとじょり。
……すげ。見たことねえ、こんな人間。

藍色の瞳と藍色の長髪。服は白とか赤とかで形成された、これまた見たことない服。

なんとこうか……」ゼリフのが美少女って言つんだなと実感させられる。

「……魔王、勇者、異世界、召還……ね。到底信じられる話じゃなれやつなんだけど……その様子を見るに、本当なんだらうなあ……」

「……お願いします、勇者様。この国を、救ってくれませんか?」

「……はあ。仁、ゼリフする?」

「んあ? なにが」

急に振るな。もつとかみ碎いて説明しろや。

「勇者になつて、國を救うか……」

あーはいはい。そこまでテンプレ進んだわけね。

「勇者とこう名の使いつパシリの奴隸になつた方がいいかつてこと
騎士の野郎どもから殺氣つぽいものが送られてきたけど氣にしない
ね」

「いいんじゅね？ 家族や友達、故郷と自分を離れ離れにさせた張
本人の言いなりになりたければ……な
「え……」

「だつて、そだらう？ あんたらは勝手に俺達を孤独にさせた張
本人どもだ」

平氣を装つてるけど、俺だつて怒つてるんだよ。

「姫様、あんたそちらへんわかつてたかい？ この『召還』って行
為は、人の恨みを買うようにできちまつてるシステムだつて
「あ……」

「想像してみなよ。そう、例えば……」こは決して逃げられないサ
ーカス場だ。自分はただ、役目をこなす『商品』でしかない。そん
なところに連れてきた張本人どもを恨まないと思うか？ そんなこ
とはあるわけない。俺なら恨む。俺なら足搔ぐ。俺はピヒロなんか
じやなく、人間だから

感情があるんだよ、俺たちには。

俺たちがあんたらの道具じゃない。俺たちは意思を持つ生き物だ。勝手に召還しておいて、国を救えだ？ ふざけるな。そんなことするくらくならあんたらの国を潰してやるぞ、俺は。

「ま、元の世界に戻してくれるなんならどうでもいいんだナビな」

……やべ。これフラグじやん。

「す、すみません……そ、送還は、あと一年魔力を貯めないとできなインです……」

……フラグの力、しかと見届けさせました

「……俺はやる」

「ん？」

「俺は、Jの国を救つてやる」

え。マジすか。

「困ってる人がいたら助けるのは、当然だろ？」

「あー、はいはい。そういうやつでしたねお前は……そういうふつだつたか？」

まあいいや。めんどくせー。

「あ、ありがとうございます、勇者様ー！」

「ああ」

「んじや、俺はここの従者……つてことなんかね」

「サポート頼んだぞ、仁」

「へいへい」

……わへ、と。

「れがテンプレルのまめなり……

……呑嚥壁、じや、たぶん送還でもないんだじやね？

…………め、まあ決めてはよくなによ、うん。
でも……畠田にさも、いにしへに調べに来るか……。うふ、ヤハリサ
ハ。

第一話 屋上の余話（前書き）

今回短いです。

第一話 屋上での会話

「……すげーなあ。月が4個もあるぞ」

俺たちが召還された場所は、どうやら城の屋上だったらしい。とりあえず今日は休んでください、とのことで、姫様（本当にそうだったらしい）と騎士っぽい人たちは城の中に行ってしまった。いまこの屋上に残っているのは、俺と親友（仮）と案内役のメイドだけだ。

空を見上げれば、4つの月っぽいなかが彼方に見ることができ。なぜ月っぽいなかなんて表現をするかと言つと、俺たちの世界と色とかいろこと違うからである。

ひとつは赤。ひとつは緑。ひとつは青。ひとつは黄土色だ。

その4つがあるで正四角形のよつて規則よく空に浮かんでこる。しかも全ての月に、模様がない。

「あれは、四大の神々がこの世界をあそこから覗いていつと言われている、別名『神の瞳』といつものです。まあ、一般的には月とか言わせてませんが」

メイドさんが補足してくれる。

神の瞳……ねえ。じゃあ太陽はどうなってるんだろ。気になるな。

「とにかく……仁

「あん?」

「すつと口を開ざしていた孝太（むちやな前思い出した）が唐突に声をかけてきて、そちらを見る。

……なんか眉間にしわを寄せて難しい顔をしていた。

「本当に俺についてくれるのか……？　お前、この国に味方するのは嫌だとか言ってたじやないか」

「あー、うん。ま、流れ的にな。お前は一人で無理しそうるし考えなしだし……なによりお前、あの状況で嫌だとか言えると思つかよ。殺されるかもしれんだろ」

「いや、さすがにそれは……」

「そうかな？　お前は勇者だが、俺はただの人間つてことになってる。そんなやつが王族にタメ口聞いて、しかも依頼を拒否しただなんてことになれば、どうなるかわかつたもんじやない。そうだろ？」

「だが俺の親友だと言い張れば……」

「バカだな。そんなの一時しのぎにしかならねーよ。ひとつせその場合、事故に見せかけて殺される」

「つ……」

「……ま、別にこの選択をそんなに後悔してるわけでもないし、別に気にしなくともいいって」

幸い、俺の家族は全員2年前に死んでるしな。

元の世界に、俺がいなくなつたことで悲しんでくれるやつらなんて数えるほどしかいない。

……問題は、本当に元の世界に還れるか、だ。

もし姫様が嘘をついているとして……もしくは本当のことを探らぬとして

俺たちが絶対に元の世界に戻れないとすれば……俺は、この異世界から勇者を召還をしようとか言い出したやつだけは殺すかもしか

ないけどな。

ま、それは置いといて……

「それより孝太、この国サイドのメイドさんがここにいるのに、そういう話はあまり持ち込まないでくれよ」

「あ……」

「考えなしも悪くはないが、少しば頭を使えバカが」

見れば、メイドさんがにこやかにこちらを見ていた。

孝太もそれに気づいたようで、慌て始めた。今頃遅いってのは。

「それよりメイドさん。お願いがあるんだけど……」

「はい、なんでしょうか」

「……靴を2人分、用意してください」

「そう。忘れていたけど今俺たち、裸足である。いい加減寒いんですね、はい。」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

そういうと、メイドさんが屋上の扉を開けて出て行つた。

ふう……それで少しは落ち着け……

「お待ひどうさまです。少々遅れてしましました」

……いや待て。

え……なにこれ瞬間移動？

気づけば田の前に、もつあのメイドさんが立っていたのである。

両手に2人分の革製の靴を持つて。

「いやいや……ええ？　いまなにしたんだ……？」

「はい、ちょっとそこで靴を作つて来ました」

「どうやつて？」

「魔法です」

「魔法……ねえ。どんなの？」

「プライベートですので、明かすことはできません」

なるほどね。だから一度屋上から出たわけだ。

「今の瞬間移動は？」

「メイドをなめないでください。人に気づかれずに近づく」とくら
い、簡単にできます」

「そりや凄い」

全ての謎が解けたので、ちょっと満足。

俺と孝太はありがたく靴を受け取り、履かせてもらつた。
うーん……異世界の靴だからか？　慣れない。

「魔法……ね。俺にも使えるのかね」

「基本的に、勇者とされる方に魔法を使えることはありません。で
すが仁様は勇者では無いようなので……わかりません」

「へえ。できるもんなら使ってみたいもんだ」

「勇者は魔法を使えない…………？」なりどうやって魔王に対抗するん
だ？」

「勇者には、魔法は使えませんが聖剣操る力があります。その他
には、身体能力がかなり跳ね上がつたり、傷の回復速度がありえな

「いやもういいなりしませうね」

なにそれどんなチート？

……俺はそんなの感じないな。ってことはやっぱ孝太が勇者で確定か。

……でもや。やるやる……

「話はまた後日とこい」と、やんわりもつ休みたいんですねが

うふ。もう寝たい。あと寒い。

「かしきまつました。ではお一人とも、密室にて案内いたしますのではぐれずにつれてきてください」

「へーい」

「はーい」

わい……明日せやるべか」とがこつぱいだ……。

第三話 H様への面会で

マイドさんについていきたどり着いた先は、城二階の客室。

……どうやら俺と孝太はそれぞれ違う部屋をあてがわれることになつたらしい。元々一人来るなんて思つてなかつただろうから、準備は早い方なんだろう。

「では、最後にお一人へ明日の予定を説明させていただきます。少々長くなつてしまつかもしれませんが、よろしいでしょうか?」

「あいよ

「大丈夫です」

前者の返事が俺、後者は孝太だ。まあわかりきつてるとほ思つけど。

それにしても、明日の予定か……明日は召還陣を調べる術をなんとかして見つけて調べようかと思つてたんだが……。

本で調べようにも、俺はこの世界の文字がわからないので魔法かなんかで自力で調べてみるしかない（孝太は読めるらしい）。この羨ましき勇者補正め！）。

他人に聞くなんてのは更に論外。もしかすれば、この国は俺たちを利用することしか考えてないかもしない。魔法のことなんて俺にわかるわけないのでから、嘘をつくのは簡単だ。

……悪いが、俺はこの国を最大限の疑いをかけながら調べさせてもらひや。

まあ、明日の予定に暇がなければ召還陣を調べるのはまた後日にもういい。

なつてしまつんだろうが。

「まずお一人には朝8時、このアルスレイト王国の国王様に面会をしていただきます。その後、勇者様は聖剣をお受け取りになり、アルスレイト王国最強の騎士と比喩されるリスカル様から剣術をお教えいただく予定となつております。剣術を習い終わった後は、のんびりしていただいて結構です。明後日からの予定はまた明日に、説明させていただきます」

「わかりました」

「え、いやちょっと待て。俺は？」

今の説明じゃ、俺前半しか出てきてないんだが……。

「仁様は面会後は自由時間となつております。」こちらも同じく、明後日からの予定は明日に説明させていただきます」

あー……つまり、お前勇者じゃないんだから勝手に自分で強くなれってことね、わかります。

「お分かりいただけたでしょうか？　ではお一人はすでに疲れが溜まつているようなので、お休みしていただきことをお勧めいたします」

「んじゃお言葉に甘えて」

「ありがとうございました」

……つと

「あ、ちょっと待ってメイドさん」

少し気になることを聞いてみようかと思い、去りかけていたメイ

「さんを引き止める。

「なんでしょうか」

「……過去の勇者は何人いて、どんな終わりを告げた……？」

「これまでの勇者様の人数ですか。現代の勇者様である孝太様を除きますと、9人となります。そのうちの3人の勇者様が魔王との激闘の末お亡くなりになられ、うち1人が行方不明。残りの5人の勇者様はこのアルスレイト王国の歴代王妃様とご結婚をし、老衰にてお亡くなりになられました」

……なるほど。

「元の世界に還ったやつはいない……か。

……行方不明っていうのは怪しいけど、還ったとしてもしの国が還したわけじゃない。

この国……ちょっと胡散臭いな。

「わかつたよ、ありがとう。俺は精々孝太が死なないようサポートをするさ」

「頑張って下さいね。応援していますよ」

「どーも」

さて……今日はもう休むとしますか。

次の日。午前8時丁度。謁見の間（たぶん。本当は知らん）。

「今代の勇者、『ウタ・ヒサギ』。そしてその従者、ジン・アカサキ。
中に入れ」

そう声が聞こえて、目の前の大好きな赤い扉が開かれた。

……現在、当初の予定通り俺たちはこの国の王と面会することとなつた。

孝太は『えられた礼装を完璧に寧文句無し百点で着こなし、悠々と扉の向こうへと歩いて行く。

……ん、俺？　いや……俺は礼装なんてめんどくさいもの着たくないから、持つてきていた高校の制服。そしてただ孝太についていくだけですがなにか

……うわあ。なにこれ殺氣？　凄いな。…………つていうか殺気が全部俺の方に来てる氣がするのは気のせいか？　うん氣のせい。きつと氣のせい。氣のせいに違いない。

他にも好意みたいな視線もあるが、それら全部孝太に行っちゃつてる。くそ。このイケメンめ。いつか殺す！

実はこの時、二人を召還した王女であるレンカだけは仁に好意の視線を送っていたのだが、今の仁にそれを感じ取る余力はなかつた。

……孝太が片膝をついたので、俺も習つて孝太の左斜め後ろで片膝をつく。

「おぬしが今代の勇者」ウタ・ヒサギで間違いないか？」

「そう声の主である」の國の王は……はつきり言つて良い印象を抱けない。

大きな赤いマント、宝石の宝飾が所々に見られる豪華な服、王冠。

……そして、人を利用することしか考えられないとしても言つよつ
な、且。自分のためになら周りは死んで当然とも言つべき田。

……俺には、わかる。こいつは間違いない、俺たちの人生を奪う
とわかつていてこの世界に呼びだした。自分のためなら人生くらい
差し出すのは当然……と。

嫌いだ。危険だ。こいつは、殺さないといけない。
そんな考えが頭を過ぎるが、今はなんとか自重した。

……今の俺には、逆らえるだけの力はない。

上着の内側に隠してある『あれ』を使えばすぐに殺すことも可能
だが……どうせそのあと、騎士に俺が殺される。
それはマズイ。それは嫌だ。

結果が全て主義である俺にしては、その結末は望むべきものでは
ない。

……殺るなら、証拠は残してはいけない。

正々堂々正面から立ち向かう。なんてのは、バカだけがやること
だ。

この世は結果が全て。

この世は勝者こそが正義。

生き残るためにには、たとえ逃亡であろうと迷いなく実行する。

それが俺のポリシーだ。故に、まだ殺してはいけない。まだ早すぎる。

人を殺したことのある俺が言つのだから間違いない。

……孝太が王と話をしている間、俺はこの醜い王をどうやって殺してやるかについて、ずっと考え続けていた。

人の人生を奪うことがどれほどの罪か……」いつには教えなればいけない。

まず、俺が殺すことに決定した一人目は……このクズ王だ。

第三話 H様への思念で（後書き）

ちょっとオーバー過ぎた気もしますが……実際仁くんは結構怒つて
るんですよ

誰を許して誰を殺すか。決めかねているんです

できれば感想をいただけると嬉しいです

第四話 孤独の『第一王女』

……さて、どうして殺す相手その1が決まったわけだが……どうしたものか。

とりあえずこの件は保留にしどくか。

そしてただいま、俺は孝太と別れて城の裏庭っぽいところに一人でいるわけだが……これからどうしようかね。

とりあえず召還陣の解析をする方法を見つけたいんだけど……そういう魔法つてないのかな。

魔法を本で覚えるにしても俺は字が読めないからダメだし、誰かに習うにしても魔法騎士みたいなやつらは忙しくて教えてくれないだろうし……。
困ったな……。

「あれ……？ ジン様ですか……？」
「ん……？」

どこかで聞いたような声だなと思い、辺りを見渡す
すると、いつからいたのか俺の右隣4m先ほどに、俺と孝太を召還した張本人であるこの国の姫様が立ってこちらを伺っていた。

「どうした姫様。孝太のここにでも行かなくていいのか？」

あいつが勇者なんだから、俺より孝太の方に様子を見に行つた方がいいんじゃないだろうか。

「いえ、邪魔になるといけませんし…… それからジン様、私は

姫ではなく第一王女です。間違えないでください」

「なんか大した違はあるのか……？」

「まあいいや」

第一王女、ね。合計何人王女いるんだ？

「ひとつ、そうだ！」

「ところで王女様～、いまヒマ？」

「一応いまやることはありますか？」

「じゃあさ、俺に魔法教えてくれない……？」

「そうだ。よく考えればこの第一王女様は俺たちを召還したわけだから、魔法が使えるはずなんだ！」

「魔法、ですか？」

「ああ。俺は勇者じゃないから、（恐らく）使えるはずなんだよ」「そうですか……それなら、私の出す条件を一つ飲んでくれるのなら……教えてあげます」

「条件……？」この王女のことだから、あんまり重要なことではないと思うが……

「俺の目的の妨げになるものなら、聞くわけにはいかない。

「それで、その条件つていうのはなんだ？」

「えっと、その、あの……わ、私を……名前で呼んでくれませんか……？」

「は？」

「そんだけ？」

「は、はい」

「…………それくらいならお安い」用なんだけど」

なんか拍子抜けだな……いや、まあ、これでよかつたんだけどね。
……。

「ホントですかっ！？」

「あ…………それで、君の名前は？」

よく考えれば俺、この娘の名前知らん……

「あ、そういうえば自己紹介がまだでしたよね。……私はこのアルス
レイト王国の第二王女、レンカ・アルスレイトです。以後お見知り
置きを」

「ん。俺は勇者久木孝太に巻き込まれて偶然召還された不運な高校
生、赤崎仁だ。よろしくな、レンカ様」

「様もやめてください……って、ええ！？ ジン様、勇者様に巻き
込まれただけだつたんですか！？」

「そうだよ。全部あいつのせいだよ……あと、様を外してほしいな
ら、俺を呼ぶときも外してくれ」

「え、いいんですか？」

「つーか、レンカ様は第二王女なんだろ？ 僕が外していいか聞き
たいぐらいだ」

普通、タメ口で聞くなんてこと王族にしちゃいけないはずなんだ
けどな……。

「えっと、じゃあ……ジン」

「ん。レンカ」

「えへへ……ジンー」

「レンカ」

「ジン！」

「レンツー、おわつー？」

何度も続けるんだろうと思いつつまた名前を呼ぼうとした瞬間、レンカが飛びついてきて俺は後ろに向かって仰向けに倒れた。

地味に痛い。

「ど、どうした？」

「えへへ……………あ

ずっと俺にくついて笑顔でいたが突如にかに気づいたように、瞬時に俺から離れて立ち上がった。

その顔は、リンゴのよひに真っ赤。

……ヤバいな、かなり可愛いぞ。

「あの、その、え、えっと……すみませんでした！」

「あ、ああ、別にいいけど……いきなつじたの？ なんだか様子がおかしかったけど……」

「その……嬉しいくて」

「嬉しい？」

「……私と、対等に接してくれて……」

あー……なるほど。

第一王女、か……たぶん、その肩書きのせいでの、対等に接してくれる奴なんて誰もいなかつたんだろう。

兄妹達とは、王家の継承者を巡る霸権争い。

父親は、王の責務。母親も同じく。

メイドも対等に接してなどくれるはずもなく、城下街に友達を作りに行くことさえもできない。

他の貴族達にだって、嫉妬のような感情しか向けられてこなかつたんだろう。

故に、常に孤独……。

……対等。

『特別』なやつらにとって、それは手に入れることが非常に難しいものだ。

特別であればあるほど、難しい……。

そして『第一王女』であるレンカにとって、それは最大の難関。
……俺が、一人目？ 十数年間の中での俺が……？

なんて寂しい人生なんだろう、それは。
なんて楽しくない人生なんだろう、それは。

……こいつは、殺せないな。

レンカは殺さない、絶対に。
むしろ……助けたい、ってか。

……俺はレンカに近づき、その頭に手を置いて、静かに優しく撫でる。

「……寂しかった、よな」

「……はい」

「一人は、嫌だつたよな……？」

「はい……」

「ずっと、『普通』を望んでたんだよな……？」

「……私は『第一王女』なんて大層な人物には、なりたくありませんでした……」

「……辛かつたか？」

「凄く……辛かつたです」

「『普通』以外、なにも望んじやいなかつたんだよな……？」

「はい……他にはなにも、いりませんでした。ただ、私は普通に生

きたかった……。でも、私は……」

「だったら俺の前でだけでも『普通』になればいい。俺の前では、ただの『レンカ』、ただの少女としていてくれればいい」

『普通』がどれだけ幸せなことか。

『普通』がどれだけ恵まれていることか。

『普通』が……

「……本当に、いいんですか？」

「ああ」

「ほん、とう……に……？」

「もちろんだ、レンカ」

「……う……ふあう……あり、がとつ……いざります、ジン……ぐ

す」

あーあ……泣かせちまつたな……

ま、今くらいは……好きなだけ泣かせてやるか……。

……そう思つた俺はただ無言で、レンカが泣き止むまでずっとた

だ頭を撫で続けていた。

第五話 幻惑と干涉と魔法（前編）

今回こつもより若干長い……かも。

第五話 幻惑と干渉と魔法

さて、思い返してみればかなり恥ずかしい会話から一刻。俺はやつとのことレンカに魔法を教えてもらひえりことになった。

ちなみにまだ時間は午前十時ほど。時間はたつぱり余っている。

「ではまず、魔力を扱えるかどうか確かめさせてください。前提としてそれが出来ないと魔法は扱えませんので」

レンカの目はまだ赤いまま他人の人達に見られると色々と不味いのだが、どうせしばらく暇なので誰に見られる事もないと本人は言つてるんだからきつと平氣だろ？。

「どうやって確かめるんだ？ 僕の居た世界に魔法なんてものは存在しなかつたぞ」

「魔力は他人からの『干渉』を受けることで具体的に感じることが出来るようになります。魔力を扱える人がいなければそもそも魔法なんて広まりようもないでの問題はないと思いますよ」

まあ、そうだな。

「ならどうやってその『干渉』を受けるんだ？」
「簡単です」

と、そう言ってレンカはいきなり俺の右手を両手で握ってきた。

普段なら『冷静』で有名な俺がこの程度で動搖するはずもないのだが、レンカが顔を真っ赤にしていたのだから少々恥ずかしくなつ

てしまつたことほしかたのないことなんだろ？。

「い、いきますよ……？」

「あ、ああ……」

何をするんだと聞きたいところだったのだが、生憎そんなに沢山の精神の余裕はなかつた。

と、直後。

「つ……！」

何かが……俺の体の中に、俺のものではない『なにか』が入つてきたことを、確かに感じた。

それは右手を通り、右肩、肺、心臓……と、そこまで巡ったところで変化が起つた。

俺の心臓部に、入つてきた『なにか』と同種類の『なにか』を感じたのだ。

…………しばらく経つとレンガから送られてきた『なにか』が体から弾き出され、空気に入れて消え去つたことを感じる。呑、理解する。

「いじつは……」

「感じましたか？」

「ああ……これは何とこつか……凄いな

言葉では表しにくいんだが……今まで何も感じることの無かつた心臓に、『なにか』が居座つてゐるような感覚がある。

おやじいさんが、『魔力』といつものなんだね。

「……ふむ」

少し、試してみよ。

思い立つたが吉日。今度は未だ手を握つているレンカの方へと、体の中に屈座る『魔力』を『干渉』させてみる。

「ふあ……ー?」

意外に簡単に出来たな……。

まるで手を動かすかのよひ、簡単に纖細に扱うことが出来た。

まあ、ずっと体の中に屈座つていて、ただ気づかなかつただけの臓器……自分の体の一部のようなものなのだから、すぐに扱えるよひになつても不思議はないだらう……たぶん。

「わ……はふう……」

「つと、マズつー」

考え込んでる間、ずっと魔力をレンカの方に垂れ流しにしてしまつた。すぐさま干涉を止め、レンカの顔色を確認する。

…………見なかつたことにしたい。

レンカは顔を赤くして、何だかどこか虚ろな目で遠くを見つめていた。何の麻薬だこれは。

けど……なんか……かわい、ゲフンゲフンッ……はい落ち着

いてー。深呼吸。スーザー、スーザー……。

結果としてレンカから漂う甘い匂いを思い切り吸つてしまつた。墓穴掘つてんじゃねーよ、俺。

いいから、落ち着け　落ち着け　落ち着け　よし。

「大丈夫か、レンカ」

「え、あう、ふ、ふあい、だいじょうぶ、です」

うん、大丈夫じゃないな。

「……気持ちよかつたです」

「はあ、そうですか」

敬語になつてしまつた。はつきり言つて、あれはあまり気持ちの良いものではないと思うんだが……

食事が喉を通る感覚に近い。何とも言えないといつうか……うん。

「それにしても、ジン様は凄いですねー……」

……語尾延ばしてゐる。まだ若干目が虚ろだ。なんだ、この症状……酔いみたんなものかな。

……魔力酔い？ 召還魔法なんて大層なものが扱えるレンカが？ 有り得ない。どんなチートだそれは。

第一、俺は微量の魔力量しかレンカに干渉させてないはず……。

「『幻想の魔力』なんて、初めて感じましたよー……」

「幻想の、魔力？」

ナニソレ。

「幻惑の魔力は……干渉に使われると、凄く気持ちよくなれる
ふう」

あー、このままじゃ埒があかない。どうしたものか……。

「……待つか」

閑話休題

「『めん、いきなり干渉して……』

「い、いえ、大丈夫です……気持ちよかつたですし」

とりあえずレンカが落ち着くまで待っていることにし、結構な時間が経ってしまった。

その間に聞いたことなのだが、どうやら俺の持つ『幻惑の魔力』とか言うものは少々特別らしい。

特に幻術に特化した魔力で、もしかすれば『究極幻術アキュラシティーフォーレンス』とか言う、未だ仮説でしか無い抗論上の魔法が使えるかもしれないとか使えないとか。

で、問題なのはこの次。

この『幻惑の魔力』はそれ自体が強力な幻術効果を持っているら

しへ、干渉等に使つてしまつと……曰く、副作用のない麻薬のよつなものらしいので、酔つたようになつてしまつりしこ。

……扱い方、気を付けないとな。

「で、では次のステップに移りましょー!」

「そ、そうだな」

恥ずかしい」とはすぐ忘れよつてこつわせでさつと進む。

あ、ちなみに『幻惑の魔力』だつたからと言つて別に幻術しか使えないわけじやない。まあ、あれらの特性のせいで幻術以外を使つても色々と普通とは多少違つことになつてしまつらしいのだが、細かいことは気にしない。

幻術が一番上手く扱える。それさえわかれば十分だ。

「では次に、魔法の仕組みについて説明を「あー、それはいらん」といじですか?」

どうして、ね……。

「敢えて言つなら、『固定概念』を持ちたくないんだよ」

「固定概念? ですか」

「そう。魔法を使うにはあれが必要とか、こつしないと発動しないとか……そういう固定概念を植え付けたくないんだよ」

ずっと考えていてわからなかつた問題も、落ち着いて違つ視点から見てみれば簡単に解けることもある。
それと同じようなものだ。

魔法には必ずあれが必要だと、そういう固定概念はあまり持たない方がきっと応用が効く。デメリットは大きいが、俺は勇者じゃないからそこまで気負わなくても……扱い切れなくても、ほとんど問題はない。

「だから、簡単な基本を教えてくれるだけでいい。頼める?」「はい!」

魔法とは魔力の扱い方を応用、複雑化することと、魔力を元に『現象』を作り出す秘術の一つである。

詠唱型、魔法陣型、詠唱・魔法陣の両種混合型、そして無詠唱型等……魔法はいくつもに分類され、主な属性は火・風・水・土・光・闇の六属性に分かれている。

他にもジンがこれから使うことになりそうな幻術や、物質変換などを可能にする鍊金術、雷や氷属性などと言った例外がいくつもあるのだが、今は置いておく。

そして、魔法に一番重要と言われるものとこつものは『思考』そのものである。

把握。否。やるべきこと、起こすべきことを自分自身で『理解』し、詠唱や魔法陣と言った補助を扱い『現象』を現実へと引き起こす。それが基本的な魔法の仕組みである（本当はもっと細かいのが、ジンの提案によりかなり簡略化）。

よりよく『理解』が出来ていれば、無詠唱も可能である。しかし、余程上手くやらない限りは、燃費がかなり悪くなる。

「と言つたところですね」

「……『理解』、ねえ……」

科学は、何事にも全てにおいて『理解』から始まる。ひとつ的事柄を理解し、そこからもさらに広く解明し、再び理解する。

そう考えるとするなら、『理解』なんてものは現代人の俺たちにとつては打つてつけなんじやないだろうか。

……まあ、孝太は魔法が使えないみたいだが、……。

「では、ジン、まずはどんな魔法が使いたいと思いますか？」

どんな魔法、ね。

そんなものは一つしかないな。元々そのために覚えようとしているんだし……な。

「俺がまず覚えたいのは……魔法陣の、分析魔法だ」

第五話 幻惑と十戒と魔法（後編）

これからはもうと一話を長くしたこと無こます。

第六話 解析の魔術

「……ナーハーナーバー」の複写眼だよ……」

レンカが魔法を使おうとしたところを田で追つた瞬間、一瞬のうちにいくつもの情報が頭に流れ込んできて、全てを無理矢理『理解』する……。

頭が痛い……。

「凄い！　凄いですよ！　ジン！」

あ、ちょ、ま……まだ頭痛いんだから次の魔法使つなああああああああああ！！

「頭があ…………死ぬう…………！」

いやホント「冗談抜きで。

……なぜこじんなことになってしまったのか。それはかれこれ數十年前……。

「分析魔法、ですか」

「ああ。幻術はまた今度にして、今はそれを覚えたいね。出来るか

？」

「はい、大丈夫です」

俺の注文にレンカはそう答え、地面に木の枝でなにかの絵……いや、魔法陣を書き始めた。

しばらく経つと書き終え、こちなりに向き直る。

「まずは初歩ですね。干渉と同じように、魔力を流し通してみてください。流したままでは魔法が発動してしまってるので、そこに気をつけてやつてくれれば大丈夫だと思います」

「ふむ……」

魔力を通す、ね。発動させないように……。

魔力を通し、その仕組みを『理解』。それが初歩つことかな。

魔力を流し、魔法陣に張り巡らせていく……。

複雑な回路、そこから連なり発生する効果、最後になにを生みだし何が起こるのか……『把握』『解明』『理解』。

「効果は……癒しの領域？　いや……ああ、そうか。魔力を流した分だけ自動的に回復魔法が発動する仕組みか。あつてる？　レンカ」

「…………」

「……レンカ？」

なんだろう、急に黙つて……。

「す……」

「す？」

「凄いですよ！　ジン！」

え、いやナニガ？

「実は魔法陣を発動させないように魔力を流すことが初歩なんです！初めてならそれだけでもかなり難しいはずなのに、ジンは、いきなり分析まで出来てるんですよ！　凄い、本当に凄いですよジン！」

レンカが俺の手を取つて、キラキラした田で手をブンブンと振り回す。

「はあ……そーなの？　普通に理解できたけど……」

敢えて言つのなら、教科書を読む感覚に近かつた。
新品の教科書を、新品な状態を保ちながらも読み進める、つて感じだな。

なんでこんなよくわからん魔法陣が俺にいきなり理解できたかはわかんないけど、そこは深く考えてはいけない気がする。

「次やりましょうー！　ジン！」

「あ、あいよ……」

そうして全ての課題をクリアしていく、こんな効率の悪いやり方はめんどくさいと俺は思い始めた。

というわけで日に『幻想の魔力』を集め、空氣中に漂う薄い魔力と、魔力同士で合成。空氣中の魔力を支配下に置き、田で見ただけで効果が全て把握できる魔法を生み出してみた。

しかし優秀過ぎて、情報がかなり入り込んできて、頭がめっちゃ痛く……ああああああああ！？

そ、そして、冒頭に戻る……。

「レ、レンカ……もうやめよう。もう十分だ。といつかやめてぐださいお願いします頭が破裂しそうなくらい痛いんです……」「もう……しかたありませんね……」

た、助かった……。

ホント頭が痛い……孝太に後で頭痛薬を貰おう……。

「もうお昼ですね……」
「そ、そうだな……いてえ……」

田に集めた魔力を元に戻し、頭を抑え続ける。

……そうだな。頭の中に火が点いてるくらい痛いと思つ。……言葉で言い表せないな。

「I.J.……孝太の、とI.J.……おひこ、行こ……づ。昼飯に……誘、おつ……」「もう……一人ではダメですか?」「駄目。無理。限界」「

あいつから早く頭痛薬貰わなければ、俺は死んでしまうわ……。

「そうですか……残念です」

「ナゼー!……」

「いや、まあ……さすがに気ついこにはいるんだけど……。

レンカみたいなのは、勇者に惚れるのがテンプレだひつよ……。

俺はどこでフラグを立てたんだ。今田会った時は最初から好印象を受けている気がするんだが。
RJ選された時は、俺、レンカのことを責めてたはずなんだけれど……。

「うーん。

「なあレンカ……俺のビームがいいのか」

「ふあいー?」

「あー……いや、やつぱなんでもない」

やつぱことかなつここと聞くのは失礼だよな……。

「早く孝太んといい行け!……レンカ場所わかる?」

「……」

「レンカ?」

「え、あ、はー! 確か勇者様はリスクカルさんに剣術を習っているはずですよー。おわりく修練場にいると思いますー!」

「うーん。なんかテンション高いな……」

やっぱあんなこと聞くのはマズかったか……なんか変なスイッチ入っちゃってるも……。

「行きましょー!」

「あ、りょー……」

「行きましたー!」

レンカはそう言い叫び、俺の手を握つてどこかへ早足で歩き始めた。

「く……これで！」

「駄目だな、まだまだ一発一発の隙が大きすぎだ！」

「ぐあっ！？」

場所は騎士の修練場。城の左側面に位置する場所にそれはある。修練場は広場のように広く、無駄なものがなに一つとしてない。地面は土がそのままにしてあり、空からは熱く暑い太陽が常に照らし続けている。

騎士達は鎧をつけている者達が大半で、毎日倒れる人が一人はあるという事実は当たり前だと言えるだろう。

道場のような場所でやることもあるのだが、あちらは他の部隊が利用することが多いので騎士達は毎日この暑い中、鎧を着て頑張っているらしい。

同情するぜ……ホントに。

孝太は……うん。なんか一際強そうな人と聖剣で斬り合っている。え？ 刃引き？ してないしてない。どう見ても殺し合いだね、うん。

まあ、この世界には回復魔法があるし、あいつには超再生能力もあるし、心配はいらないだろうなあ……。

「よー。頑張つてるかい勇者（笑）様～」
「ほんにちわです。リスカルさん、勇者様」

レンカと恒例の挨拶をしてやると、一人は斬り合つのをやめてこちらに向き直った。

リスカル……確かに、騎士団長だつて。この人は、金髪に黄緑色の目、整つた顔を持つイケメン。リア充爆発しろと言いたい。
……でも孝太の方がイケメン度が高いな。あーホント……一人共、このまま死んでくれ。

「仁か」

「王女自らここに来られましたか……あとそつちのは、確かジン殿と言つたか」

「ういーっす。お前らホント暑そだなー。」しつこ見んな、シッシリツ…

「おま……そつちから着といてそれはないだろ……」

「冗談だよ……2割くらいは」

「ほんと本気か！」

「つとー？」

「てめ！ いきなり剣振り回すな！ 危ねえだろうが！」

ぐ……激しく動いてまた頭が……。

「冗談だ。1割程な」

「コイツ……頭が痛くなかったら即殺してやるところだぞ」

「自称『冷静』くん、慌すぎだよ」

「黙れ勇者（笑）」

あー……ホント頭痛い……なんか喧嘩する気が失せてくる。

「調子が悪そうだな、ジン殿」

「うん……ただの魔法の使いすぎだよ……」

「凄いんですよジンは！ 幻惑の、ムググッ……！」

俺はレンカの言葉に即座に反応。速攻でその口を手で塞ぎ、相手の反応を伺う。

……とりあえず、バレてはいみたいだな……困惑してゐた
いだが。

……このリスクカルとか言つやつは、敵に回る可能性が高いからな。
あまりこじらの情報を『』えるのは控えた方がいい。

……絶対に忘れない。たとえこちらの生活がどれだけ楽しく変化
してしまったとしても、俺は忘れるわけにはいかない。

こいつらは俺達を拉致した張本人共なんだ。ただ俺達を利用する
ためだけに呼び出した、怨みの対象……。

……俺はレンカの口から手を外し、とりあえず言い訳を探す。

「あー……あれだよ、うん。普通の人より魔法の修得がかなり早い
って言いたかつたんだよ、レンカは」

「へえ。凄いじゃないか、ジン」

「レンカ様がそう言つのであれば、相当なんであろうな」

「どーも」

なんとか」まかせた、か。

……といひで、なんでレンカは黙つてるんだ?
からひ、と確認してみた。

「ジンの手の匂いがしました……」

……見なかつたことにしよう。

……聞かなかつたことにしよう。

決して、顔を赤くして目が虚ろで危ない発言をしていたレンカなんて見ていない。絶対に。

「それより、もう皿だぞ。飯食おうぜ」

あと頭痛薬くれ。

「もうそんな時間か……わかつた、行こう。リスカルさんはどうします?」

「俺は他の騎士共と一緒に食うから、気にしなくていい」

よかつた。イケメンが一人も一緒にいたなら、きっと食事が不味くなる。

「そんじゃ行こうぜ、孝太、レンカ」

「そうだな」

「あ、はい！」

とりあえず、いひして俺達は食堂へ三人で向かつたとさ。

第七話 勇者と復讐の記憶（前書き）

はい、今回最後の方でジン君が結構キャラ崩壊します。
……うつとうこの設定はやりすぎたかな……。

第七話 勇者と復讐の記憶

頭痛薬を飲み昼飯を食べ終え、俺は次に一人で魔法修練場へと向かつた。

敵戦力は把握しておく必要があるということを行つたわけだが……まあ、凄かつたな。

詠唱というあからさまな隙がなければ、かなり強いと思われる。まだ分析魔法程度しか使えないただの人間の俺にしては、正面から戦つて勝てるとは思えない。

まあ俺、勇者じゃないから、どんな外道な方法とってもいいよね？ 砂で目潰し×詠唱の邪魔とか。武器を投げるとか。

その後は特に目的もなく城の内部をブラブラし、夕食も孝太と食べ終えた。

そうしてただいま現在。俺達はメイドさん明日からの予定を、孝太の部屋で聞かされていた……。

「ど、いうわけだ」

「いきなりどうしたんだよ、ジン」

「いや、画面の向こう側の奴らに説明してやつてただけだ」

「この世界つて病院ありましたつけ、メイドさん」

「黙れ孝太。メイドさん、話の続きお願いしまーす」

明日からどうなるのかで、これから予定が変わるな……。

それに予定が決まれば、王を殺すのはいつにするかも正確に決め

られる。

「それでは、明日からの『』予定を説明させていただきます。よろしいでしょうか？」

「あいよー」

「わかりました」

「まず明日の午前中、勇者様には再びリスカル様に稽古をつけていたぐことになつております。これから基本的に毎日やうなる『』予定なので、『』了承を」

「ま、毎日……」

孝太が引いている……余程キツかつたんだな、あれ。

…………ザマア！

「ジン様は午前の間は自由時間となつております」

またこりゃ適当だなおい。

「明日の午後1~3時。お一人には再び国王様に謁見する形となつております」

……またアレと会わないといけないのか。

「今度はなにをするんだ?」

「明日は勇者様の従者発表となつております。その後は夜まで、そのチームで自由時間となつております」

なるほど、ね。みんな仲良く頑張れってか。

……くだらない。

「明後日からの午後は基本的に毎日、お一人共チームでの自由時間となります。互いに何かを教え、教えられ。そのようなことを目的として作られた時間ですのでご理解ください。ここまでで、なにか質問はござりますか？」

「俺はないな」

「俺もない」

「そうですか。直に、力試しとして上位の魔物の討伐を国から命じられることになりますので、『』と承ぐださい。魔王討伐へと旅立ちの日にちは今のところは決まつてはおりません。以上です

……魔物の討伐、ねえ……。

つまりは、殺し。生き物を殺せつことだよな。

……勝手に呼び出しておいて、自分達で倒しに行かない、か。

本当に良い、身分だな、この国のクズ共は。

「そつかい。んじゃ俺は部屋に戻るからな。また

「ああ。また明日な、『』

孝太の部屋を出て、音を立てないようにその扉を閉める。

……さて、と。とりあえず召還陣を確認しに行く深夜まで、なにしてようかな……。

午前0時30分。

俺は魔法で照らされたの部屋の明かりを消し、窓を開け放つ。冷たい風が頬を打ち、少しだけ体が震える。

「うわ、暗つ……落つこちないかな、コレ」

「これは一階の客室のため、飛び降りる」とはあまりおすすめできない。

というか、屋上が目的地なので飛び降りる必要性がなに一つとしてないのである。

表の扉から出てもいいけど、人に見つかると厄介だからな……。

城の側面の石壁には、結構な数の隙間が存在している。今日確認していたので間違いない。

暗くてよく見えないながらも、分析魔法で、魔力の角度から壁の形を推測して足を掛ける。

「意外と便利だな……コレ」

……下を見るな。上だけを見て行こう。

「……神の瞳、ね」

……とりあえずかなりの時間をかけて壁を昇りきり、なんとか屋上に到達。

ただいまの時間。午前1時20分。

「……よし。誰もいない……と」

さあて、『この魔法陣を隅から隅まで調べさせてもらいますか……。本当に送還ができるのかどうか、とか調べないとな。

俺はゆっくりとその巨大な魔法陣に近づき、中央に立つ。

「……分析、開始」

魔法陣に魔力を流し込み、存在を『把握』。効果を『解明』し『理解』する。

「超身体能力、超再生能力の付加……これは予想通りだな

さらに分析、解析……

「無駄に大き過ぎだな……『鳥の眼』でも使えば一瞬で理解できるんだろうけど」

『鳥の眼』は、幻惑の魔力を目に集めるアレである。

「……やつぱ呑還しかできないみたいだな。予想はしてたけどなんかつら……レ……レ?」

なんだ……「ノンは……！」

「なんだよ……なんなんだよ……「ノンは……！」

……送還はできない。それはいい。それはもう、『仮に』していい。

けど……「イッは、なんだ……！」

「『洗脳』魔法ついで……なんなんだよ……？？」

洗脳？ 洗脳だつて？

『『I』の国に命の限りを尽くす』？ なんなんだよそれは。ナンナ
ンダ『ノンハ……！』

「…………孝太は…………アイッは…………！」

……ふざかるな。

ふざけるなふざかるなふざかるな……！

「…………まだだ。もつと、寄越せ……！」

確実な情報を。『I』の呪いを解く方法を！

「『鳥の田』、発動……！」

『勇者様、魔王を倒してください』『この国のために命を捨てるのだ』『呪われた勇者よ……哀れな』『俺はこの國のためなら、いくらでも命を捨てるよ』『助けてくれ、勇者様』『…………ありがとう』『リン……逃げろお……このままじゃ、俺はお前を……』『そこの呪いが解ける者など、いるわけがない。魔王ですら解けない呪いなのだ』『幸せだよ、俺は』『貴方を、助けたい』『いつかまた会いたいな』『死ぬのか、俺は？　まだ、復讐も果たせぬままに……？』『死ぬな！』『なあ、リン……俺を、殺してくれ』『何度もって繰り返す。いずれ来る、復讐の時のために』『ごめん……あらがとう』『なら、僕も人生を捨てよう』『大好きだよ』『君を手伝おう』『この國への復讐のために、この世に魔王を残そう』『神の定めた運命だよ』『もう、戻れないんだよ……』『勇者召還なんて魔法の存在は、俺が許さない』『殺したく……ない、のに…』『ああ……どうやら僕も、もう終わりみたいだ』『ほら……笑つてくれ』『勇者が魔王を倒すのは当然だろ？』『哀れな小僧だ』『復讐は、終わらない』『もう……眠るよ』『また会おう。次の世代で』『俺を運命に縛り付ける。たとえどんなに長い時間が掛かろうとも、必ず復讐を果たすために』『…………カイト』『前に立つのなら、殺す必ずまた会いにくるから……だから』『泣くな……また会えるから』『違う！　俺は洗脳なんて……』『貴様が我々に逆らうことは、出来ない』『認めない……俺は認めないぞ。こんな運命を……』『俺は……勇者なんだ』『またなのか……また、俺は……』『ごめんね……カイト』『竜殺しか……』『また会いましょう』『死者蘇生の魔術だよ』『本当に哀れだな……俺は』『人質か……！』『似ているね、君と僕は』

『許さない…………！

俺は忘れない。絶対に！

いつか必ず、俺はこの国に復讐を果たす！』

叫
𠵼

声を上げる。喉が破けるほどに。喉が焼けるほどに。

そして

俺は、全てを『理解』した。

卷之三

新編一麤用書

そして、初代勇者から続く復讐の決意を……。

「……………そ、うか……………そ、うこ、う」とだつたのか

誰かの記憶?
否。俺の記憶。

俺の、九つの人生全ての……復讐の記憶。

やつと取り戻した。やつと思い出した。

やつとだ
！

九つの人生全てを犠牲に、やつとこの時が来た……。
呪いに捕らわれず、この世界に来た……！

「許さない……絶対に

だから俺は、
復讐を

そにか。そにか。かのな。

八
！
！
—

……さあ、永遠の勇者の運命を終えた、復讐の時だ。

「この国を、滅ぼしてやる」

第八話 復讐者、覚醒（前書き）

はい、今回やけにジン君はキャラ崩壊します。
あと、結構醜悪な内容に……。

第八話 復讐者、覚醒

ずっと待っていた。この時を。

初めて勇者として召還された時から、永遠に待ち続けていた。

「アはは……くく……」

この国は、何度も俺を裏切ってきた。
何度も。何度も何度も！

「もう、殺す相手を選ぶなんてことはやめよう。

レンカと孝太以外、全員殺せばいいだけじゃないか

殺したい。残酷に。醜悪に。

全ての復讐のために。九つの人生の、復讐のために。

「兵士も騎士も魔法使いも平民も貴族も王族も……全て殺せばいい
だけじゃないか」

迷う？ なにを？

ありえない。俺の九つの人生全ては、この復讐のために生きてい
たのだから。

「……さあ、もう部屋に戻るつ。もう眠い」

焦つてはいけない。

慎重に。確実に。俺は進もう。

全ての復讐は、ここから始まるんだ。

「……なにをしているの」

「……」

声が、聞こえた。

高い声。未だ聞いたことのない声。
いや、違う。今日聞いたな。

「……どうしたんですか、宫廷魔導師、リヘナ・リズトヘラインさん

「それはこっちのセリフだよ、今代の勇者の従者、ジン・アカサキ」

振り返った先には、魔導師のローブを着込んだ、今日魔法修練場で一度だけ言葉を交わしただけの少女が立っていた。

翠色の髪と目。耳が長く、いわゆるエルフという人種だ。

九つの勇者の記憶のお陰で、俺にはそれがどんな生物なのか理解することができる。

……理解できるが故に、どれだけ危険なことなのかも……わかる。
いくら九つの勇者の記憶があるとはいっても、勇者に魔法は使えなかつた（聖剣に常に魔力を取られ続けて、安定ができないため）から、今の俺にはあまり意味がない。

俺が今使えるのは、上着の内に隠した『ある物』と分析魔法。それだけだ。

「君、魔法陣を分析していたね」
「してない」
「嘘を吐くな」

なにが目的か……。

……口封じ、か？

……なんとか逃げられないか……。

「洗脳魔法……呪いのこと。召還魔法の秘密、君は知ってしまったみたいだね」
「だったら、どうする？」

「殺す」

その直後、ズバッといつ切断音と共に……俺の左手が、斬り落と

された。

「あ、ぐうーーー？ ガああああああーーー？」

「秘密は守らないといけないからね。僕は君を、殺さなければいけない」

……俺を、殺す……だと。

やつとここまで来たのに？ やつと復讐が始まるところに？

……それに、こいつはこの『呪い』のことを、知つてたんだよな？ 知つて……なにもしなかつたんだよな。

そんなやつに……俺が？

「誰が死」《舞えよ風》敵を斬り裂く刃となれ。「飛風刃」
[ワイングカッター]「つー？」

左足の膝、脇腹、右肩を斬り裂かれ、俺は声にならない悲鳴を上げる。

血が流れ、下の魔法陣へと滴り落ち、魔法陣が鈍く光り出す。だが、それだけでなにも起こらない。

魔法陣が暗闇を照らし、屋上が鈍い光に包まれる。

「く……そ……」

……俺は……死にたくない。

死にたくない、死にたくない！ 死にたくない！！！

やつと同じまで来たんだぞ？

何度も悪者として生きて、やつと
来たんだ。

なのに……なのに死ぬわけには……

右手を上着の内側に入れ、俺は『ある物』……拳銃を手に持ち、リヘナへと銃口を向けた。

...弓を金を、引く。

【ガウンツツ！ー！】

景気の良い音が響き渡り、音速を越える鉄の塊が相手へと迫る。

「？」

避けられた、か。

擊つ！ 撃つ！ 撃つ！

腹を突き破り、腕を貫き、足の付け根を抉る。

卷之六

しかし運はそう良くも続かない。

「『飛風刃』……」
「ウインドカッター

「な……ぐあ！？」

右手が切断され、ボトツといつ音と、拳銃と共に地面へとずり落ちた。

血も大量に噴出し、それに伴い次第に視界も不明瞭になっていく。

「許さない……私に怪我を負わせるなんて」

「はつ……そんな、覚悟も……無かつたの、かよ……！」

手が、ない。両手がない。

拳銃が持てない。これじや戦えない。

どうすればいい。どうすれば……？

「つ……？」

直後、右腕に激痛が走った。

今までにない痛み。切断を越える痛み。

ゆつくつと目を動かし……俺は見た。

……右肩から先が、何も存在していなかつた。

「うぐうああアアああああアあああああ……！」

「無様に死ね」

右足の肉が半分飛び、左足の先が切断される。腹の一部が無くな

る。右目が、無くなる。喉が……潰れる。

痛い……痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！

痛みに耐えきれず、俺はそのまま地面に倒れ込んだ。

倒れた俺の目の前には、残骸が広がっている。
俺の体、肉の残骸……。

……叫ぶ気力は、もうすでに存在していなかった。

……何度も体験した、『死』の瞬間だ……。

……どうでもいい。なにも考えられなくなってきて、眠くなつてくる。

「はあ、はあ……僕の、勝ちい……」

「…………う」

「あは、ははははは。あー……血でベトベトだよ。洗わない」と

「……」

……リヘナが、重い足取りで屋上の出口へと歩いていく。

それを見つめながら、思つ……。

……俺は、死ぬのか？

また、繰り返すのか？

また、勇者として生き続けないといけないのか？

また、復讐が果たせないのか？

……嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！！

俺はもう繰り返したくない。

だって、やつとここまで来たんだぞ？
やつと、全てを思い出したんだぞ？

なのに、死ぬ？

フザケルナア！！！

俺は……俺はア……！！

「死ヌわけニバ 行ガネエンドア ゆ…………」

痛む喉のせいでの上手く言葉が言えない。

それでも、俺は叫ぶ。叫ぶ。叫ぶ……。

けど、体中が痛い……起きあがることさえ、困難な程に……。

……でも、冷静になつてみれば、そんなもの……本当に問題になるのか？

ほり、あの女はまだこちらに気づいてない。あいつはいま後ろを

立て。立ち上がり！ 走れ。走り切れ！

だからやれる。俺ならやれる。

「俺ハあ、『復讐者』^{アヴェンジャー} ナンだ」

俺はあ…………俺はなあ…………！

諦めるな。俺はやれる、俺にしかやれない。

自分を騙せ！ 全てを騙せ！

『幻惑の魔力』を纏え。自分に幻術を掛ける。
痛くないって。動けるって。

痛いのなら、動けないのなら……騙せ。

痛い？ それがなんなんだよ。
どうでもいいだろそんなこと。今はあの女を殺す。それだけだろ？

向いてる。

アハハ、バカな奴だ！

俺が後ろにいるってのに！！

「ぐひつ、ふひひひひやひやはひひやふひつ、ぐひやひひひ」

さあ、行こう。殺しに行こう。

一歩ずつ。確実に。殺しに行こう。

「アヒヤ非刃非非ヤ負非やハ刃非非非火ヤハ刃、亞非や比ヤ非比非
刃ハ刃！！」

殺してみよう。

殺してやる！

殺して見せよう。

何度も。何度も。何度も。

殺してあげよう。

だって俺は、『復讐者』なんだから。
アヴェンジャー

「非火比」

グチャ、グチャグチャ
。。

「日や比非！」

バクツ、グチャ……。

「キイ火比刃非ヤ非亞非ヤ火比！！」

……食べる。俺は、人を食べている。

さつきまで俺を瀕死に追い込んでいた相手を、食べている。

「火比非ヤ非刃非……ゴフツ……亞刃非ヤ火比」

食べることに躊躇はない。だって、食べれば強くなれるんだから。

俺は、禁術『死を喰らう者』で【力】を食っているんだから。

「亞非非イ非ヤ非刃火比歩亞非ヤ火比！！」

……そうだ。俺は強くなってるんだ。

強くなつて、絶望を振り撒くんだよなあ？

復讐を、するんだよなあ？

……なら、まだ死ぬわけにはいかねえよなあ……。

どれだけの怪我を負おうとも。
どれだけの傷を負おうとも。

俺は、まだ……

俺は、もつ

死にたく、ないんだよ……！

「……」

そう、だ
死、に、た、く
お、れ、は、ま、
な、。
だ

。 。 。
。 。 。

「
ガチャ
ジ、ン?」

第八話 復讐者、覚醒（後書き）

ジン君、既に本格的な狂人ですねー……。
後、別にジン君が死んで終わりなわけではないです。
【ちゃんと】続きますから安心してください。

第八・五話 死者蘇生の禁術（前書き）

はい、今回はレンカさんがまあまあキャラ崩壊します。
すんません。悪気はないんです……。

P・S・ 今日はずっとレンカ視点です。

第八・五話 死者蘇生の禁術

（Side・レンカ・アルスレイト）

「…………ジ、ン？」

……私は屋上から聞こえた微かな叫び声のせいで目が醒めました。

本当に小さく聞こえただけでした。

耳を澄ましていなければ、わからないくらいに。

でも、私には聞こえました。私には誰の声か理解することが出来ました。

それが、誰の声かということが……理解できました。

私は着替えて、急いで屋上に向けて走り出しました。

廊下を走り抜けて、階段を昇りきつて、屋上の扉に手を掛けて……

彼は……、ジンは……

血塗れで、体の半分以上を損失させて、誰か同じように血塗れ人の上で倒れて……死んでいました。

空気が冷たい。風が冷たい。全てが……冷たかった。

ジンの死体を見つけてしまって……胸が痛くなる。

悲しいって……ジンを殺した人が憎いって……そう思いました。

「……イ……ヤあ……」

…………嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！

認めたくない。ジンが、死んだなんてこと。

「わ、たし……は……？」

初めて彼と会った時、私は一人に向かつてこう言いました。

「勇者様、よくぞ来て下さいました」

……今考えてみれば、凄く自分勝手な一言だと思います。

勝手に呼び出しただけなのに。

人の人生を、私が壊してしまったというのに。

…………そして、彼はいました。

「想像してみなよ。そう、例えば……」こは決して逃げられないサーカス場だ。自分はただ、役目をこなす『商品』でしかない。そんなところに連れてきた張本人どもを恨まないと思うか？ そんなことはあるわけない。俺なら恨む。俺なら足搔く。俺はピエロなんかじやなく、人間だから

……『商品』。

自分の考え方を持たず、ただ役目をこなすのみ……。

私にピッタリだと、私そのままだと思いました。

誰かに褒めて欲しくて、言われたことをやり続けていた。
みんなに褒めて欲しくて、命じられた勇者召還を頑張った。

そこに私の意思は、なにひとつとして存在していない。
他人の言つことをこなすことしかできない。

それは酷く滑稽でした。
それは酷く醜悪でした。

他人に寄り掛からなければ、生きていけない。

……私は、自分の考え方を貫き通せているジンを、羨ましく思いました。

次の日。お二人が父様への謁見を終えた後、気まぐれに城の裏庭に足を運んでみると、ジンを発見しました。

私は彼に話しかけて、近づくとこんなことを言わされました。

「どうした姫様。孝太のところでも行かなくていいのか？」

……姫様と呼ばれて、少しだけ違和感を覚えていました。
なので訂正をお願いすると、

「なんか大した違いあるのか……？」

……実は私にもよくわかりません。

そうして難しく考え込んでいますと、彼は良いことを思いついた
とばかりにこんなことを言い放ちました。

「じゃあさ、俺に魔法教えてくれない？」

……正直、驚きました。

私は誰にも頼られることができなかった。召還魔法だつて、本当は妹
がやつたとしても問題はなかつた。私が、褒められたいがために…
勝手にやつていただけだつた。

代わりのある、道具。

居ても居なきても変わらない、肩書きだけの王女。

……そんな私を頼ってくれることが嬉しくて、私は、この人と仲

良くなりたいって……ずっと前に諦めていたこと、また希望を持ちたいって……そう、思つてしましました。

そんな私の気持ちが……凄く辛かつた思いを……

私は、初めて『対等』に接してくれたジンに、思つままに言い放つてしまった。

……嫌われたかもしれない。

私は、酷く弱いから。

一人じゃ耐えられないから。

ジンも、私の勝手な思いを聞いて引いてしまったかもしれない。

……そう、思つていた。

なのに彼は、なんでもないかのようになんに優しくしてくれた。慰めてくれた。

同情じゃないと思う。ジンは、凄く自分の気持ちに正直な人だから……。

……もし、これがただの依存だったとしても……。

……もし、これがただ人恋しかつただけだったとしても。
……もし、これがただ狂つていただけだつたとしても……。

ジンに名前で呼んで貰つて、頭を撫でて貰つて、楽しく会話をし
て……私が彼を好きになつた事実は、変わらない。

たとえそれがどんな理由だとしても。

私は
……。

それ、なのに……。

「あ……ああ……」

舌が上手く回らない。気持ちが落ち着かない。涙が止まらない。

……………

デウシト、ハナシタ?

「ウルカナ？」

二〇四

ふと、私はジンの『異様』差に、少しだけ気づいて近寄った。

血の臭いはまったく気にならなかつた。ジンのことで頭がいつぱいで、他に考えがいく余裕がなかつたからなのかもしれない。

私はジンに近づき、しゃがんでみて……おぬしとおばつこた。

「魔力が……荒れてる？」

そう。魔力の流れが、『自然』とは似ても似つかない『異常』だったのだ。

特に、ジンの周囲の魔力が。

まるで、『狂氣』に渦巻いているようだ。

「うー…………」

その原因に、私はすぐにたどり着いた。

同時に、ジンを助けるための方法も……思いつきました。

「…………そうですよ。そうですよ、そうですよー。そうですよー……。あるじゃないですか！ ひとつ……一つだけ、ジンを生き返らせる方法が……！」

…………そうだ。たった一つだけ、ある。

許されざる魔法。忌むべき魔法。禁忌とされている魔法。

禁術『死者蘇生』
ネクロマンシー

かつての勇者が仲間を引き連れて命々倒しきつたと言われる死靈魔術師、魔王に匹敵するとまで言われた禁術使い『ブエルヘルト・エルハラン』の負の遺産。
アンデッドを生み出す魔術として既に開発されていた『死靈魔術』
を『死者蘇生』へと進化させた天才大魔導師だった。

彼は両親を戦争で殺されたと言つ。

彼は妹を国に殺されたと言つ。

彼は兄を魔物に殺されたと言つ。

彼は恋人を、治るはずの病気なのに、見捨てられて失つたと言つ。

なんて悲しい人生なんだろつ。

なんて理不尽な人生だつたんだろつ。

彼は必死だつたのかもしれない。

もうなにも失いたくなかっただけだつたのかもしれない。

……それでも、それがたとえどんな理由であらうと、私は構わない。

ジンが生き返らせられるのなら……禁術だつて、望むといひです。

「ジン……絶対に、私が生き返らせますから……」

だから……

私とずっとといつしょにいてください。
大好きなんです、ジン。

第八・五話 死者蘇生の禁術（後書き）

もう少し……もう少し進めば、やつと復讐の話まで行ける……。

第九話 狂い続ける二つの意思（前書き）

……なんだか、暗いシーンは、書いてるとトーンショーンが下がっていくなあ……。

第九話 狂い続ける一つの意思

……初めてこの世界に呼ばれた時、俺は洗脳を……『呪い』を受けずに、この世界に降り立つた。

まだ、初めて起動する魔法にはその効果が積まれていなかつたらだ。

……奴は。この国の、当時のアルスレイト王国の奴らは、勇者として召還された俺を戦争の道具として使い始めた。

許せなかつた。許すわけにはいかなかつた。殺してやりたいと思つた。

だが、それは叶わない。巻き込んでしまつた妹を人質に取られていたからだ。

そしてそのまま俺は当時流行つっていた不治の病に懸かつてしまつて、国に捨てられたんだ。

……復讐は、その代では果たすことが出来なかつた。

だから、俺は自分をこの世界に縛り付けることにした。

勇者召還の魔法陣に俺の個別情報を登録し、この魔法陣から人を呼び出す場合は俺が優先的に選ばれるように仕掛けを施した。そして同時に、記憶を取り戻すための魔法も……。

……俺は自分を、復讐の運命に縛り付けた。

次に俺は、ある『魔術』を創り出した。

即ち、『魔王を生み出す魔術』。

『全ての能力を底上げする』という付加効果の魔法。

勇者召還の術式をベースとして生み出したオリジナルの魔法。

発動条件。『勇者を世界単位で閑知し、勇者が消えてから15年経つことで使用可能』

『この魔法は人間に怨みを持つ魔族にしか使用不可』

これにより勇者を戦争の道具としてではなく、魔王へと対象を向けさせることに成功した。

願わくば魔王にアルスレイトを滅ぼして貰つても良かつたがさすがに無理だつたか。

魔族以外のほとんどの種族で同盟を結ばれたからな……。

この『魔王を生み出す魔術』の術式を魔族の国へと残し、初代勇者であつた俺は……死に絶えた。

一代目から、『洗脳』の魔法が勇者召還に導入された。

……俺の仕掛けに気づかれたのではなく、ただ効率よく利用するために。

……復讐は、また果たすことが出来なかつた。

『呪い』のせいで、俺はなにもすることが出来なかつたんだ。

ずっとやうだつた。ずっと転生と召還と死を繰り返してきた。

意味もなく。ただ、初代勇者の復讐の意志の元……何度も、何度も
も何度も！

沢山の仲間に出会った。仮染めの仲間だ。忌むべき仲間だ。
殺したい。殺してやりたい。でもそれは叶わない……。

……だが、ある時……七代田勇者としてこの世界へと降り立つた
とき……。

俺に、転機が訪れた。

それが……俺と、禁術使い『ブルヘルト・エルハラン』の
かつての親友との出会いだったんだ。

……暗い。黒い。……冷たい。

何も感じない。意思も、感覚も、なにもかも。

……俺は、死んだのか……？

俺、は……？

「つ……！」

「…………は…………？」

「…………ジ、ン…………」

「つ……？ レンカー？」

暗い室内。部屋にある物の全てが隅の方へと寄せられており、俺
はこの部屋の中央……ある魔法陣の中心で横たわっていたようだっ
た。

恐らく、ここはレンカの部屋なのだろう。他に誰も居ず、窓の外
からは星しか見当たらないことからここは高い階層なのだと判断し、
そう推測する。

そしてこの部屋の主……第一王女レンカ・アルスレイトは、俺の
すぐ側に立つていて、今までに倒れ落ちるどころだった。

すぐさま起き上がり、その体を支える。

「……ジン……ですよね？」

「ああ……そうだ。俺だよ、レンカ」

「……やり、ましたよ……わた、し……せいこう……せいろい……しま、しました」

レンカの力無い泣き顔を見ていて、俺の中に段々と記憶が戻つてくれる。

……そうだ。俺は全てを思い出して……そして、宫廷魔導師のあいつと戦つて……重傷を負つて、死んだんだ。

……そうだよ。俺は、死んだんだ。

なら、なんで俺はここにいる…………？

どうして…………。

「つ……レンカ……お前、まさか…………ー？」

慌てて周囲の魔法陣の構成を観察し、推測の答えに直接行き着いてしまった。

見覚えのある巨大な魔法陣。荒れ狂う、『異常』な流れの魔力。

禁術『死者蘇生』
ネクロマニシー

だけど……これ……確か……

十人の生贊が、必要じやなかつたか……？

「……殺した……のか……？」

「……はい。眠つていた何人かの兵士さん達に、生贊になつて貰いました」

「…………くく……あはハハは…………そ、か」

……俺のために、殺してくれたのか？

迷い無く？

躊躇無く？

星が見えていた。まだ朝にもなつていなかつた。

そんな短時間で、決断したのか？

俺を、救つために……？

「…………ありがと」

頭を撫でて上げると、レンカは微笑んで俺に体を預けてくれる。

……俺は、お前の國に復讐アヴァンジャーをしようとしているんだぞ？

……なあ……レンカ……。

「なんでこんな……こんなに必死に、俺を助けてくれるんだよ……」

俺は復讐者アヴァンジャーなんだぞ？

俺は、お前の家族共を殺し、國を潰すためにこの世界にやつて来たんだぞ？

なんで……そんな、やつ……？

「ジンが、好きだからです」

好き。すき。スキ。

たつた、それだけの理由で？

たつたそれだけの理由で10人の犠牲を躊躇無く差し出して、忌むべき禁術にさえも手を出したつてこのいつのか？

……なんで。

なんで。なぜ。どうして。

俺はお前から憎まれるべきなのに。

俺はお前に憎んで貰わないといけないのに。

「……………『めん、レンカ……今はまだ、俺にはなにも言えない』

俺は憎まれるべきなんだ。怨まれるべきなんだ。
お前に、殺されるべき奴なんだ。

だから、俺はなにも答えることはできない……。

だつて……お前は……俺を殺す……

「復讐者……ですか？」

「つー? どう、して……」

「……こんなに近くにいて……読心の魔法が効かないわけがないじ

や
な
い
で
す
か

……なる、ほどな……。

なんでもおみ通しつてわけだ。

「……だつたら、もうこだらつ……俺を殺せばいい。そうすれば
お前は「嫌です！」」

「どうして！　俺は全てを壊すためにこじにやって来たんだぞ！
お前の、全てを壊すために！」

怨むはずだ。憎むはずだ。

俺は一年前、両親を強盗に殺された。

だから憎んだ。だから怨んだ。だから銃を奪つて、殺してやつた！

俺は、あの時の強盗と同じなんだ。

レンカだつて……きつと俺を……！

「私に……好きな人を怨むなんてこと、出来るわけないじゃないで
すかっ！」

「つ……」

好き？　俺を？　どうして？

理解できない。俺は、復讐者なんだぞ？
アガエンジャー

レンじゅあるまーし、俺を好きなんてこと……。
忌むべき相手を好くなんてこと、あるわけが……あつていいわけ
がない！

「私は…………めつと狂つているんだですよ」

狂う？　どうして。なぜ。

「…………凄く寂しかったんですよ」

寂しい？

「ずっと一人だつたんですね……誰も私なんて相手にしてくれなくて
…………凄く、寂しくて……。

ジンが私に話をしてくれるまで、ずっと一人だつたんですね。そう
…………言いましたよね？」

「でも…………それでも！」

たつたそれだけの理由で……どうして。なんでなんだよー！

俺は…………

「…………ジン、…………」
「つー？」

…………唐突に、レンカの顔が目の前に迫つてきて、思考の中斷は余
儀なくされてしまう。

反射的に体を反らしてしまつたが、レンカはさうに詰め寄つてく
る。

「レン、力……？」

そしてそのままレンカは目を閉じて……唇を重ねてきた。
驚きに、目を見開く。

レンカは止まらず、そのまま俺を押し倒して……顔を上げた。

涙で濡れている、その顔を。

「私にとって、貴方は私の全てなんです」

「……」

「私に手を差し伸べてくれた、ただ一人の、大好きな人なんです……」

「……」

……狂っている。狂ってしまつていて。

変わらない。何もかも。

いくつもの人生を捨てた復讐者と、狂いに狂つた一人の少女。

……本当に。

本当に……この世界は残酷だ。

何處よりも、なによりも。

残酷で、醜悪で……。

いんな運命が……決めつけられていて。

俺は……………本当に

「本当に哀れだな……俺達は」

第九話 狂い続ける二つの意思（後書き）

もっと上手く文章を書けるようになりたい……。

第十話 騎士団の実力把握（前書き）

はい、今回は戦闘とも言えない戦闘をします。本当はもっと緊迫した勝負が得意（比較的に。下手なのはわかつてます）なんですが、それはまた今度。

今回スムーズに書けたのでいつもより長いです。

第十話 騎士団の実力把握

ボロボロに倒れた青年を見おろし

『呪われた勇者よ……哀れな』

彼はそう言った。

翌日。早朝。

傷は完全に全てが完治していた。

さすがはブエルヘルト・エルハラン……ブエルの禁術だ。傷跡すら見当たらない。

ああ、言い忘れていたが……俺の使う『死を食^{デッ}らう者^{ドイ}』もアイツから教わったものだ。

この禁術は、使うと代償に『狂氣』が体を蝕み始める。俺がそんな風になっていた半分はこれのせいだ。

七代目の頃は、この『狂氣』で洗脳の呪いを衝突させて、一時的に正気を取り戻せていたんだよな。

話を戻そう。

『死を喰らう者』の本来の効果は、【力】の吸収にある。相手の体を喰らうことで能力を取り込み、自分を強化する。喰つたあの宫廷魔導師さんは、魔法が得意っぽかったので最大魔力と魔法威力が結構上昇した。

身体能力などの変化は微妙だ。もっと吸収しないと駄目だ。勇者時代と比べてかなり見劣りする。

まあ、あの頃は勇者召還の恩恵があったからな……忌々しい限りだが、あの魔法はかなり強力だ。究極魔法の一つと言つてもいいくらいだ。

俺も魔王を創る術式を開発させたけど……うん。勇者召還をベスにしたとはいって、あれに劣らないようにするのは大変だった。

……復讐の最後で、あの勇者召還の術式は壊さないといけないな。
「おい、どうした仁。ボーッとしてるけど大丈夫か？」

「つと、回想はそろそろやめるか。

「大丈夫だ」

現在、俺と孝太は食堂で騎士団といつしょに食事を取っている。レンカは、なんか王女の業務があるらしい。内容知らんけど。

今回、俺も志願して剣の稽古に参加させてもらうことになった。相手の力量……特に、騎士団長リスクアルの実力を正確に把握したいからだ。ついでに勇者の孝太も。

俺も勇者時代は剣で戦つてたからな。九代にも渡つて……な。だ

から、おそれなく正確に計ることができるはずだ。

良い機会だから聖剣についての詳しい説明もここでしておこう。

孝太の持つあれは、聖剣【エクスカリバー】である。
なぜ勇者にしか扱えないか。理由は簡単である。

剣が重すぎるのだ。

3mほどの指さえかなり簡単に持ち上げられる力を持つ勇者が、
聖剣を普通の直剣くらいの重さを感じると言えばわかるだろうか。
凡人では持ち上げることすら叶わない。

さらに聖剣には、所有者の魔力を常に吸い取り続けるという特殊
な力を持つ。これにより魔力が安定しないため、魔法を使うことが
できない。これが勇者は魔法を使えない理由だ。

ちなみに『死を喰らう者』は、実は魔力を使わない。

敢えて言うなら、使のは精神力だ。説明した『狂氣』も精神に
関係してるだろ？

次に聖剣の効果なのだが、これはもうチートだ。

まず、魔力を光に変換して放てる。ただの光ではない。ビームみ
たいなヤバいものだ。

それを爆発させて範囲的に相手をぶっ殺せたり、刀身を光を伸ば
して10mくらいにできたり（重さそのまま）、拡散状にもできる
し集約もできる。

敵はもちろん一瞬で死ぬ。もつ仲間いらないんじやねと感じるく
らっこ。

ついでの効果としては、剣に人格があることくらいか。アイツ……俺は嫌いだ。

まあ、聖剣の説明はこんなところだろう。

「騎士が十人も行方不明……それに宫廷魔導師も……なあ、これ、どういうことだと思う、仁？」

孝太がそう言って、俺の方に向き直る。

「この話は、朝二人してメイドさんから聞かされた話だ。どうやらバレてないらしい。話が出た時はさすがに身構えたが、大丈夫そうだったので安心した。

……メイドさん、か。屋上であの速さ、そして未確認の魔法（おそらく鍊金術だ。速攻で靴を作り出したのだろう）はきっと驚異になる。おそらく、誰よりも……。

もつと強くならなくちゃいけない。俺はまだ、きっとメイドさんには勝てない。

「さあな、俺が知るか。でも、気をつけた方がいいかもな」「そうだな、俺たちもその暗殺に「違えよ」

「ほう……違う、とは？」

俺が孝太の言葉を遮り、孝太が間抜けな顔をしていふといふでリスクカルがそう問い合わせてきた。

「あんたはわかつてんだろ。俺と孝太が気をつけるべきなのは、こ

の国の奴らだよ」

「な……!?　おい仁！　それはどうじつじつだよー。」

「つぬさいな、説明してやるから黙つて！」

「いいか？　俺たちは一日前……つい最近召還されたばかりだ。さ
らに勝手に呼び出された被害者の立場……。

普通なら反抗の念を抱くだろ。お前は無かつたけどな。
んで、呼んだ直後にこうなったわけだから、まず俺たちが疑われ
る。

犯人が見つからず、行方不明がそのまま続けば……最悪、暗殺だ
な

孝太が反抗の念を抱かないのは『呪い』のせいだがな。王と一部
の奴らも、そのせいでこういうことを起こせないのはわかってる。
だから、本当は俺たち一人ではなく、俺だけが必然的に疑われる
わけだが……。

「暗……殺……」

「幸いこの食事に毒が盛つてあることはなかつたけどな。
けど、俺たちは今、監視されてる。これが疑われてるという
確率を100%に引き上げてる」

そうなんだよ。今日は起きてすぐ、視線を感じた。
試しに解析の魔術で周囲を確認してみたが、2人のやつらに監視
されていた。
もちろん、俺だけだけどな。

「よく気づいたな。監視もそつだが……毒はどうやって調べたんだ

？」

リスクルが悪びれもせずにそう聞いてくる。どうやらこいつは全

てを知つてゐる敵だということが確定した。『俺だけ』を監視していることを知つてゐるのだから、必然的にそつなる。

「ああ、食堂のおばちゃんに毒味させたからな」

実際は解析の魔術を用いたわけだが。

「ヒドいな……」

「お前らにそれを言う資格はないだろ。殺そつとするんだからな

……マズい。記憶を取り戻したせいか、王国の奴らと話す時はどうしても拒絶を隠しきれない。

冷静にならないと……。

「孝太もいつまでも惚けてないで、さつと食べろ」

孝太が俺たちの会話を聞いて惚けている内に、俺とリスカルはもう食事を終えている。周りも食べてる奴らは減つていて残りはかなり少ない。

「あ……わ、悪い」

「しつかりしろよ、勇者さ……いや、孝太」

勇者様。かつて呪われた勇者だつた俺はそう呼ぶことを皮肉と感じられて……気づけば言い直していた。

まあ、いいだろう。首を傾げてはいるが大して気にしてないみたいだし。

そうしてリスカルと共に待ち続け、食事の時間を終えて訓練へと入つていった。

「今日の訓練には、勇者」ウタの従者であるジン・アカサキにも参加してもいいことになる。容赦なんてしなくていい。ビシバシやつてくれ。以上だ」

「ハツ！！」

「おい、鬼畜だな。

俺まだこの世代じゃ一度も剣なんて握ってねーんだぞ。少しぐらい容赦はしやがれ。

……まあいいや。とりあえず孝太とリスクカルは後回しだ。まずは雑魚騎士共でウォーミングアップだな。

「誰でもいい。誰か俺と戦わないか？ なんならハンデくれてやってもいい」

バカにした態度を、わざと取る。格下と思つていい相手にそいつ言われるのは気に食わないだらつ。

案の定、騎士達の空気が悪くなつた。陰口を叩く者もいる。

孝太も「言い過ぎだ」とか言つてくるが無視だ。どうせ戦うんだ。本気でやつてしまおう。

「生意氣な奴だ。いいだろう、俺様が相手をしてやる

うわ、俺様とか言う馬鹿マジでいんのかよ。こういう奴って大抵
噛ませ犬なんだけどな。

「んじや 戦やろう。真剣と木剣、どっちでやひつか」

「真剣だ。格の違いを教えてやる」

……仮にも、九代にも渡つて勇者をやつてきたんだけどな。それ
だけ剣を扱つてきたんだ。こんなモブとは確かに格が違うよな。

「そうだな、といあえず俺は左手使用禁止。このハンドでいこう。
格の違い、この程度で埋まるかな？」

「てめえ……！」

「なめてるとでも？〔冗談言いつなよ。格下相手に本気を出す必要も
ないだけさ」

「殺す！」

俺様騎士が隣の騎士から直剣を受け取り、俺に向けて走り出した。
それを見て目を細め、俺も同じように直剣を受け取り、だらんと
力無く持ち前掲姿勢を取る。構えもしない。

それを見て馬鹿にしているとでも感じたのか、さらに相手は激高
する。

「ハア――――！」

ただ単純に。力任せに。俺様騎士が剣を振り下ろす。

「いつもやはり馬鹿なんだろうか。こんな単純なもの攻撃にすら
なっていない。」

とりあえず剣を斜めに構え、受け流す。

「弱いな、いやマジで」

「このシ…！」

即座に下から振り上げてくるが、同じよひに受け流す。

「なんで騎士やつらんの、あんた」

「うおおおおおおおおお…！…！」

突き。振り下ろし。振り上げ。横屈ぎ。袈裟斬り。逆袈裟斬り。
振り回し。

ただ速いだけだ。俺の足元にも及ばない。すぐに決着を着けることもできるが、俺はただ受け流し続ける。

……弱すぎる。一部の魔物ならこれで簡単に殺せるだろうが、知恵を持つ相手が敵の時は楽にやられそうだ。

「いつ、対人戦しつかりやつらんのか？ こんななら、使いやすい槍にでも武器を変えろよ。

「くそつ！ なんで当たらぬ！」

「単純すぎ」

俺様騎士の振り回しを大きく弾き、蹴る。

同時に、全身の力を足に移動させていたのでかなり吹っ飛ぶ。なにこれ楽しい。

一人に距離が開き、互いに構え直す。俺は前掲姿勢でだらんと剣

を下に垂らして持っているだけだが（これが俺の基本の構え方だ。長時間戦うためになるべく疲れない戦い方を追求してこうなった）。

俺様騎士は呼吸をかなり乱しているようだが、特に俺は変わらない。といふかまったく疲れてないんだが。

気づけば周りの人達は訓練をしていないで、俺とこいつの戦い（というか一方的な遊び）を観戦しているようだった。

「ハア……ハア……」の、野郎が……ツ……

「悪口思いつかないなら言わなくていいよ。格好悪いから。つーか負けゼリフだぞ」

「くそ！ くそ！ なんでこ【ガンッ！】グア……！？」

もう田障りなのでとつとと終わらせようと思い、全身の力を足に集め一気に駆け出して、俺様騎士の額を剣の柄で強打して気絶させてやる。すぐ倒れだし、反応もできていなかつた。

……なんて弱いんだ、こいつ……。

「おーい。誰かこの泡吹いてる奴どつか連れてくれ」

適当に観戦してた騎士共にそう言い放つと、俺はとりあえず孝太とリスクカルの元へ向かつた。

あの俺様騎士は隅の方の日影で寝かされるみたいだ。もう出番はないが。

「凄いな！ 仁！」

「いや……あいつ弱すぎるのでしょ……」

結局フェイントを一度も使ってこなかつたぞ。マジ弱い。
こんなのはウオーミングアップにもならない。困ったな……。

「いや、かなり凄い方だ。剣の心得はあるのか？」

リスクアルが聞いてくる。

「……あると言えばあるし、無いと言えば無い」

「なんだそりや。つていうかお前、剣道部でもないのに剣なんて振つてたのか？」

「だから無一ツで」

「じゃあどうこう」とだよ」

言えるか。これは守るべき最優先事項の機密なんだ。

「剣の心得もないのによくあそこまでできたものだ。才能か？」
「知らん」

「勇者殿が最初に戦つていた時は、武器を向けられるのが怖くてなにもできていなかつたというのに。真剣で無理矢理打ち合わせて続けて慣れさせたがな」

……無理矢理、ね。

不快な感情が押し出し表情が変わりそうになるが、なんとか自重する。

「あ、あはは……でも、もうあんまり怖くはないよ」
「ふーん……なあ孝太、俺と戦^やらない？」
「は……？ む、無理無理！ あんな動きするお前に勝てるわけな

「いつて…」

「へえ。なるほどな。つまり孝太は剣の腕が俺以下か。なら戦うことになつても聖剣の効果だけ気をつけてればいいか……。

「んじゃリスカル団長様、一戦やろうぜ?」

「……ふむ。それも面白そうなのだが、俺は勇者を早々に鍛え上げねばならんし、他の者にも経験を積ませないといけないしな……なら、フヨイー！」

リスカルが唐突に言葉……名前か？ を叫び、こちらを見て言った。

「うちの副団長が相手になるよ。相当な実力者だ。俺にはまだ及ばないがな」

……こいつとはやつぱ戦えないか。しかたない。

そいつが楽に倒せれば、リスカルも倒せるか……？

と、考えている内に騎士達の波をかかり分けて素早く誰かが田の前に飛び出してきて、言つた。

「お呼びでしょうか、団長」

女の声だ。考えごとを中断し相手を確認してみる。

身長は俺よりやや低い程度なので170cm前後だらう。紺色の髪を肩胛骨辺りまで延ばしたストレートで、顔立ちは田付きが鋭い。こちらも田は紺色だ。

服装は周りと変わらない鉄製の訓練用鎧だが（俺は制服だ。頑張って使い続ける）、他とは違い一線引いて見える。鋭利な印象を受け、客観的に見て美人と呼ぶにふさわしいと思う。特に俺はなんにも感じないが。

四肢は細い。が、結構な筋肉があるのはわかる。いわゆる細マッチョ？いや、違うか。体付きは……文句がない。レンカの小さい胸では比べものにならないだろう。というか戦う動きに支障が絶対に障じてるレベルだ。大丈夫なのか？

孝太の方を確認してみるが、特に良い反応は見られない。相変わらず綺麗だなくらいにしか思っていないようだ。

……この女性はチラチラと孝太に視線を向けているので、たぶん好意を持っていると思うのだが……これは酷い。気づいて笑顔を返しやがつた。そこは無視してやれよ。

案の定、多少取り乱していた。

……孝太、お前はなんて鈍感なんだ。気づけ。

……ま、どうせ俺はこの人も殺すわけだし、孝太はこのままで構わないか。

「俺と代わりにジン殿と戦ってくれないか？俺は勇者殿を稽古しなければならんのでね」

「え、あ……ハッ！ わかりました！」

と、どうやらこの人が副団長のようだ。予想はしていたが。

副団長はリスカルに返事をすると、俺に向き直つて言つ。

「副団長のフロイ・セラフルです。良い勝負にしたいと思つ」

「今代の勇者」「ウタ・ヒサギの従者、ジン・アカサキだ。よろしくな」

「

どうやら勝負は確定事項らしい。

「んで、あんたはどうする？ 真剣か木剣か。ハンデはいるか？」

俺のこの態度で目付きが鋭くなり、睨んできたようだが……この程度の殺氣、気にもならない。

だが、強いのは確かみたいだな。あの宫廷魔導師と戦った時は暗くて視界も良好ではなく、焦っていたし武器も拳銃しかなかった（ちなみに拳銃はレンガが回収していくので定位位置に仕込んである。球があと一発しか残っていないから、近い内になんとかしたい）。けど今は……。

今なら、殺^ヤれる。

「真剣だ。ハンデなどいらん」

無愛想にフロイとかいう女は言い放ち、距離を取り剣を構える。

……無駄にしゃべらない辺りが、熟練の腕を感じさせている。

こりや、なかなか大変かな？ 奥の手を使つまでは保ってくれるかね。

「それじゃ……始めようか、副団長様」

いつものように前掲姿勢でだらりと腕と剣を下げた構えをしたまま言い放った俺のその一言で、この勝負は始まりを告げた。

第十話 騎士団の実力把握（後書き）

主人公、記憶が戻つてちょっと性格が荒っぽく……まあいいかな。
感想などが貰えると嬉しいです。

第十一話 副団長と魔装技の使用（前書き）

新技です。

あと今回はバトルが内容の大半です。

第十一話 副団長と魔装技の使用

青年は震える声で

『違ひー、俺は洗脳なんて……』

彼へと飛び出すとしていた。

先手は譲つてやるとじばかりに力無く構えていたが、相手はそれを意にも介さずこちらの様子を伺つてくる。

そうなると必然的に空気が固まつたように鋭くなり、ピリピリと焦がすような音が聞こえてくる。いつな氣もする。

沈黙。静寂。

「来ないのかい、副団長さんよ」

「どうやら君は『後の手』を取る』ことが得意のよう見えた。だから私は、動く気はない」

「……わつ。つまりないな」

しかたなく自分から攻めてやることにして、一步下がつて重心を中心移動する。

力無くその場で一秒ほどゅっくり前掲姿勢に戻りつとした瞬間、地面が爆ぜた。

全ての力を足に集約させ、重心の移動の瞬間も利用し一瞬でフェイの目の前まで達した。

が、相手はそれに驚くことなく対応していく。

フェイは俺が右斜め上から繰り出した袈裟斬りを見切り、受け止めた。同時に鉄同士の高速度の衝突により、火花が飛び散り、ギンツといつ景気のいい音が周囲に響きわたる。

と、同時に重心を一瞬で後ろに変更する。

通常ならここで相手は自分の力が前に無駄に集中してしまい隙ができるのでそこを狙えばいいのだが……やはりそこは副団長。力を引ひともせず足を一步踏み出し、勢いのまま剣を横廻ぎに振るつてくれる。

それを突きの準備をしつつしゃがんで避け、立ち上がる瞬間に足や肩から発せられる力ん腕に集約。斬り返しをさせる暇もない瞬間的な突きを繰り出してやる。

が、剣での反撃は間に合わないというのは相手も感じていたようで、瞬時に手元に戻された剣の腹で防がれる。

奇襲は失敗。普通にやれば俺的に不利なのでバックステップで後退する。長期戦は苦手なんだ。勇者時代では相手一発で殺せたし。

「なるほど、強いな」

素直に賞賛する。

すぐに攻守の切り替えができる瞬時の判断力、……かなり上達しているのだろう。今の変則的な戦い方も樂々と攻略されてしまった。

「君もあれだけの大口を叩けるだけの実力はあるよつだ。認識を改めねばなるまい」

「へえ、今のが本気じやないとでも言いたいのかい？」

「そうだ」

瞬間。

気づけば既にフェイは遠くには居ず、すぐ目の前まで走り込んで来ていた。

……速い。

勇者時代ならば簡単に避けるなりカウンターを決められるなりでさるその右斜め下からの逆袈裟斬りに、俺は反応ができない。

……そう。直前でやられていれば反応できなかつただろう。

が、俺はまるでそれがわかつていたかのように紙一重で後ろに避けて見せ、多少切れた前髪が風に流されて飛んでいくのを確認していた。

さりなる鋭い斬り返し。これもわかつていたかのように剣で受け流し、俺はそのまま相手の左斜め側に飛び出す。

フェイの体を擦れ違い様に横廻り、後ろに回つた後に突きを連續で繰り出してやるが、二つとも防がれた。

そうして再び俺はバックステップで距離を取り、前掲姿勢で力無く構える。

「……見事だ。よく今の剣戟を避けた」
「お褒めに預かり光栄です、つてか？」

……本当に避けられるとは思っていなかつたのだろう。軽く目を見開いて驚いていた。

ちなみに今のは『先読み』という技術であり、同じような戦い方をする相手と何度も戦つた経験があるのなら誰にでもできる技だ。要するに『慣れ』だ。

俺は周りにはない、九代に渡る勇者の経験がある。いろんな奴らと戦ってきたんだ。先読みなんて俺には造作もないことだ。
それに、解析の魔術もある。それを使えばさらに凄いことになるだろう。奥の手は別にあるから、まだ底は付いていない。

あまり手札を見せびらかすのもマズいしな。

「……本当に剣を握るのは初めてなのか？ 戦うのも？」
「当たり前だろう。俺と孝太は争いのない平和な場所から来たんだ。武術の経験すら一つもないね」

学校の授業で何度かやつたが、あれは数に入れなくもいいだろう。

「本当にか？」

「しつこいな。当たり前だ。なんなら孝太に聞いてみてもいいんだぜ？」

「……だが、君のその戦い方は……」

「才能だけでは生み出せない、とでも？」

「……」

無言で頷いた。

「なら、俺に勝つてみろよ。そしたら教えてやるかもな……俺の、
強さの秘密」

「上等だ！」

俺の賭けという名の挑発にフェイは即答で乗り、剣を上段に大きく構えた。俺に届かない距離で。

(魔装技か……！？)

俺の予想はどうやら当たったようだった。赤色の魔力がフェイの持つ鉄製の直剣に渦巻き始め、周囲の魔力……赤色魔力の流れが目に見えて変わった(解析を使えばすぐわかる)。

「訓練程度で魔装技使うのかよ……」

「ほう、よく知っているな」

「そりゃな。魔法と並ぶ有名な技の一つだろ」

魔装技。それは魔法に近く魔法ではない一種の技術のことを指す。自分の魔力を武器や防具などに定着させ、周囲の魔力を用いて固定し、色々と強化したり特殊な効果を持たせたりする技術、だつたかな。これは勇者でも使えるので俺はよく愛用していた。そのせいでもつとチートっぽくなつたが。

確か、今の俺も一回使っている。ほら、あの屋上での戦いの時。俺は自分の魔力を纏い、痛覚を壊す力を自分に掛けていた。だから

動けたんだ。

赤色魔力は……どんな効果があつたかな。確か火属性魔法が比較的強くになり（と言つても『豪炎の魔力』には遠く及ばない）、魔装技状態の時は……鋭利化？ いやこれ黄色魔力か。硬化は黄土色魔力だし、衝撃は青色魔力だつたよな？

んじや赤色つてなんだ？ …… そうだ！ 魔力自体を物質に変換する力、だ！

半分はただの魔力。半分だけ個体。そんな感じのよくわからないものだつた記憶がある。

（どうするか……『幻惑の魔力』を魔装させるか？ ……だが武器に纏わせると俺の『幻惑の魔力』が相手にバレる確率が高い……
…どうする？）

「行くぞッ！」

「つち！ やるしかねえか！」

赤色魔力がフェイの持つ鉄の直剣を余裕で包み込み、その大きさは2mは越えていると嫌でも理解できた。

それが、放たれる。

上段に構えられた直剣が大きく振り下ろされ、かなりの勢いで飛んで迫つてくる大量の赤色魔力が視界を覆う。

「これも特訓だ……『鳥の眼』発動ッ！！」

ズキッ！ という効果音が付きそうなほど頭の激痛に顔を歪め

る。

それでも目を開いたまま、俺は視界全てを覆い尽くす赤色魔力に視線を向けた。

瞬間。

「ぐ……」

あらゆる情報が頭の中に直接入り込んで、『把握』『分析』『解析』『解説』……そして全てを『理解』した。

【赤色魔力。

純度

| | | |
|-----|----|-----|
| 赤色 | 31 | 47% |
| 緑色 | 17 | 02% |
| 青色 | 8 | 7% |
| 黄土色 | 8 | 04% |
| 水色 | 8 | 23% |
| 黄色 | 14 | 21% |
| 黒色 | 0 | 0% |
| 白色 | 0 | 0% |
| 紫色 | 0 | 0% |
| 茶色 | 0 | 0% |
| 透明 | 0 | 0% |
| 混沌 | 0 | 0% |
| 虹色 | 0 | 0% |
| その他 | 10 | 33% |

【魔装技変換確率精度。

46% / 100%

【合計魔力量計測。MP59・8374・・・】

(中略)

【合計レベル計測。LV3】

く……やつぱかなり頭痛い。

けど……これなら行ける！

(変動率……よし、解析完了。この魔装技の変動率式も解明完了了)

ちなみに『鳥の眼』使用からここまで時間、僅か1秒。九代も勇者をやっていたんだ、並列思考も高速思考もなんでもできる。

……さあ、奥の手を見せてやろうじゃないか。

そう思い、俺は指先にも『幻惑の魔力』を纏わせる。

「式の変質は無いな。なら」

俺は周囲の魔力 赤色魔力以外 を指に集めた『幻惑の魔力』で狂わせていく。赤色魔力だけが『異常』として捉えられるように。赤色魔力を純粹に魅せるために。

まあ……奥の手というのは、『幻惑の魔力』を使った魔装技のことだ。今回は指先に魔力を集め、効果を『魔力干渉』に指定した。

そうして目立つた赤色魔力だけが『鳥の眼』の前に覆い広がり、さらなる解析……いや、『分解』を開始する。

(余分な情報はカット。純粹に赤色魔力のみを『鳥の眼』で捉えることでさらなる最奥へと解析を進める……成功したな)

「ここまでくれば……」

ちなみにもう赤色魔力は前方1mくらいに迫っている。高速思考でもそろそろ追いつかなくなってきた。

が、もうなにも問題はない。

目の前の赤色魔力構造の根本を『鳥の眼』で導きだし、それを『幻想の魔力』の魔装技で狂わせる。

【魔装変動率急減少。……………0%を確認】

【魔装技解除。赤色魔力の空気還元の開始を確認】

と、無効化と同時に赤色魔力が俺へと衝突するが……無駄だ。もうただの魔力に戻っている。

それに、これは良い機会だ。相手は赤色魔力で俺が見えてないし(俺は見える。『鳥の眼』使ってるから)、さすがに魔装技を放つてすぐに反撃されるとは思っていないだろ?。

(一気に決める……!)

魔装技発動。部位は脳と両足。効果は『限界解除』。

「 うおおおおおオオオオオオオオオオオオオオ ! ! !

重心を全て前に移動。力の全てを足に集約させ、走る。
さらに魔装技『限界解除』により脳から発せられる命令の限界がコリッター外されているため、いつもの倍近い速度が計測される。

……足の筋肉纖維がヤバくなつたが、『痛覚遮断』で気にしない
ようにする。

「 ッ ! ?」

「 遅い ! ! ! !」

相手が反応するより遙かに速く横廻ぎに斬り払い、鉄製の鎧を斬り付ける。

音もなく。ただ一線……。

「 な……に…… ! ?」

振り向き確認すると　なんと鎧が綺麗に半円状に断ち切れていた。幸い生身の体に傷はないようだが……うん、これ、危なすぎじやね?

鎧がまったく意味を成していなかつた。気を付けていなければ殺していたかもしれない。

それは困る。まだ、殺すわけにはいかない……。こんな大勢のところでそんなことしちゃ終わりだ。

「ツー？」

何故か簡単に足がもつれ、俺は後ろに倒れ込んだ。

まあ当然か。絶対に肉離れ……最悪粉碎骨折かな？

うわ……魔装技解きたく無^ねー……。

「俺の勝ちだな、副団長さん？」

上半身だけ起きあがらせ、それだけ笑顔で言い切つてやる。もつホント満面の笑みで。かなり嫌みになるように。

「……ああ、負けたよ」

…………無視か。人が良いんだろうか？
まあいい。

「はあ……ん？」

周りを見れば、今回もみんな訓練を中断して観戦していたようだ
った。

うんお前ら、しつかりやれ。

「孝太（）、助けてくれー」

「……え、あ……ね、おつー！」

なんか惚けてたな。俺が勝つとは思ってなかつたんだろう。

しかし、力を見せすぎたかな？ 予想以上に副団長が強くて

困った……。団長の方は、現状じゃまだキツいかな。

「足がヤバい。とりあえず担いで魔法の医療部隊かレンガのとこ連れてつてくれ

「わかった」

周りからの賞賛や嫉妬の視線を全て無視し、孝太の肩に担いで貢う。

「軽いな」

「勇者補正のせいだな」

人一人くらい楽に持ち上げられるだろうな、そりや。

……ああ、やっぱ治療の時は魔装技解除しないといけないよな……。

……つていうか、もひ頭痛くないな。一回とか二回くらいなら平気ってことかな?

「そんじや……今回は俺もう訓練やめるんで、後は頑張つてください」

最後に適当にそつ言い放つと、孝太に連れられて俺はこの場を跡にした。

第十一話 副団長と魔装技の使用（後書き）

次か、次の次くらいに、ジン以外の残りの従者発表します。ジンくんも従者に強い人が来るのは重々承知します。いやー、復讐つて大変ですねー。

第十一・五話 聖剣と観者の呪い（前書き）

今回もハ・五話と回じよひにジン視点は一切ありません。

今日は主に孝太視点です。

第十一・五話 聖剣と勇者の呪い

（ Side : 久木 孝太 ）

……本当に凄いな……ジンは。

勇者補正もなく、戦った経験すらなく……俺が聖剣に頼つてやつと届くような相手に、勝つてしまった。

それに、頭も切れる。

周りをしつかり見て、常に警戒していく隙がない。……ホント、俺なんかよりもよっぽど凄いよ。

本当に俺が勇者でよかつたのかな……？

……俺は……？

「おいで」行つてゐる。そつち壁だぞ

「あ……すまん」

「つたぐ……考え方か？」

やつぱりいつには、なんでもおみ通しか……。

「ああ。本当に俺が勇者でよかつたのかなって。お前の方が、向いていたんじゃないかつて思つてたんだよ

「……」

……？ なんだ、無視か？

「……これで良かつたんだよ。……これで……」

「や、そつか……？」

そんな真剣に返さなくていいんだけど……。

「……絶対、助けてやるから……」

「ん、なにか言ったか？」

「気にはしない。いいから早くレンカんとこ連れてってくれ」

「あ、ああ……わかった」

氣にするなってことは、どうせ俺には関係ないことなんだわ。仁は頭が良いからな……無理に聞くこともない。仁にも仁なりの考え方があるんだ。

……それはそれとして。

「なあ、仁」

「ん？」

「……レンカさんって、どうしてくるんだ？」

「…………お前もう死ねよ」

「ええ……ー?」

それは酷いな……。

「わかんないなら医療部隊のとこでいいから」

「いや、それもどこだかわからないんだが……」

「駄目だこいつ。早く何とかしないと……」

ぐ……しかたないだろ。まだこいつ来て三日しか経っていないん

だ！

お前が詳しく述べるんだよ……。

「わーったよ。俺が案内するからその通りに動いてくれ

「ああ……」

「とりあえずそこ左な

……仁、もしかしてこんな広い城内の通路全部把握しているのか……？

……お前、俺が特訓してる間なにしてたんだ……。

仁を第一王女レンカ・アルスレイトの元へ送り届けた後、俺は訓練所に戻るために城内の廊下を歩く。

歩く。歩く。歩く。

。

「…………迷った」

広い。広すぎる……。なんで仁は迷わないんだ……。

くそ、しかたない。戻つて仁に道案内を……。

「いや……仁を送つた場所、忘れた、俺……」

……拠点の城で迷う勇者。

……そんな肩書きいらねー……。

『なにしてるんですか、『ウタ』

「エ、エクス?」

何処からともなく声が聞こえてきて、反射的にそう言い返した。

……そう。この声は、俺が持つ聖剣に宿る人格『エクスカリバー』

……長いから略してエクス。

エクスがしゃべることは、まだ誰にも言っていない。
仁にも、リスカルさんにも、フェイさんにも……。
ちなみに女性の声だ。

「いや、迷っちゃって……」

『……あなたは馬鹿なんですか?』

「ぐ……そう直球に言わなくても……」

いや、確かに仁には言われ慣れてるんだが……他の人に言われるのは辛い。

あ、剣か。

『歴代勇者の中でも、貴方は一番の馬鹿ですね』

「し、しかたないだろ……俺は仁とは違うんだ

『他人を盾にするのは良くないですね』

「ぐ……すまない。悪かった」

確かに、俺は自分を仁と比べすぎているのかもしれない。

自重しないと……な。

フヨイさんにも自信を持ってって言われたし……。

『まったく……私には貴方が『レイ』や『カイト』のようになる姿が想像できません。まあ、ならない方がいいんですが』

「……レイとカイト、か。確か、歴代勇者九人の中で、国に反旗を起こした歴史を持つ一人だつたか……？」

その話は、俺が初めてこの聖剣『エクスカリバー』を受け取った時にエクスから聞かされた話だ。

国を裏切つた二人の勇者がいる。その名は、赤城零と篠崎海都。国の思想を裏切り、魔族と共に反逆をしたとかなんとか。

……それで沢山の人達が死んだって言ひのこ……どうして……。

『そうです。初代勇者レイ・アカギと七代目勇者カイト・シノザキ……。どちらも、世界の禁忌を生み出し、利用した一人ですよ……』

「世界の……禁忌？」

なんだ……それ。俺は聞いてないぞ。

「その二人は何をしたんだ？」

『片方の……初代勇者レイは、この国全てを裏切り、この世に魔王という存在を植え付けました』

「な……！」

な……どう、して……！？

なんで勇者が……魔王を……。

勇者は魔王を倒すために呼ばれるんじや……。

あれ？ なら……初代勇者が魔王を生み出したっていつ
んなら……その初代勇者は……いつたい何のためにこの世界に呼ば
れただ……？

……そんな考えが一瞬頭に掛け巡るが……”すぐに氣にならなく
なつた”。

” そうだ。今はエクスの話を聞かないといけないよな。あんなこ
と、気にしてしまったく意味はない”。

……あれ？ 今……俺はいつたい何を……？

『 それでもう片方の、七代田勇者カイトは……禁術に手を染め、こ
の国へと魔族と共に戦争を仕掛けました』
「 戦……争……」

……どうして。なんで勇者がそんなことをするんだ。

” 勇者はこの国のために、命の限りをつくすために喰ばれたつて
いつのに”。

” その役目を忘れて反逆を起しそうだなんて……許されぬことじや
ない”。

『 貴方は、そつはならないでいてくれますか？ 貴方は、私たちの
国を守つていただけますか？』

「 ……” ああ。十分。全部十分。この国の勇者として、俺が”

” そうだよ。俺がやらなきゃいけないんだ”。

” 仁ではなく、この俺が……”。

『ふふ、やはり《呪い》は無事健在してますね。あのジン
といふ人間は.....どうも焦臭いですからね.....用心するに越したこ
とはないです』

『エクスがないやう色々と弦こいてるが、” まつたく氣にならな
耳に入らない”。

” 気にする」ともない。『氣にする必要もない.....”。

” 俺は俺がやるべきことをやるだけ。この國のために命を捨てる
ことだけ”。

『おや、どうやら誰かがこいつに向かつて来ているようだわ。
私は黙りますよ』

と、やつぱりたきりエクスは本当に何も言わなくなる。

こつも、じうだ。俺の前でしかしゃべらないし、他人がいると口
を開こうともしない。

まつたく.....何でだらうな。

.....” まあ、俺が気にする」とではないか”。

「 おや、おぬしほ.....」

「 え?」

と、なにやら古くへ古くへ口調が聞こえてきたので通路の左側に田を
き田に田をき田をき田をき田を

向けてみると、なにやら派手な衣装を着込んだ金髪の少女が立つてこちらを伺っていた。

金髪は後ろで一つに纏めている、いわゆるポーテールにされており、顔はまだ幼さが残る容姿だ。その瞳は翠色の光を放つており、今はその目が細められている。服は……説明しにくいが、緑色と赤色と青色と黄土色の線がそれぞれ連なり、黒を主体として白を陰と置いた感じの派手な服……とでも言おう。左肩には、ビリヤの生徒会の腕章宣しく、宫廷魔導師とそこには書かれていた。

「確か……勇者!」……一郎だったかの?」

「なんで飲み物!?」

「飲み物なのかコーラというものは……美味しいのか?」

「あ、それは個人によって違う。俺は飲めないけど仁は好きだつて」「ジン……ああ、勇者の従者だったかの。して、おぬしの名は

……なんだつたかの?」

「俺は久木孝太……いや、コウタ・ヒサギだよ。君は?」

「妾はサラ・メルトフィリア。一応宫廷魔導師をやつてある

ああ……一応なんだ……。

「しかし……確かに勇者は今の時間、騎士の訓練を受けている時間ではなかつたか?」

「それは……」

「それは?」

「……実は迷いました」

聞かれたのでしかたなくそう答えると、きょとんとした表情になつた後、腹を抱えて笑い出しあがつた。

……く、なにか言い返したいのに、言い返せない……。

「へへへ……勇者が城で迷うか……おぬし、面白いの……へ

「放つところくれよ……もうここから放つとこてくれよ……」

「へへへ、はははははまー、面白い、面白いぞー！」

「う……なぜもつと笑い出すんだ……。

「へへへ……良からぬ。案内とまではいかなが、少し手伝つてやるつ

ど、そう言つと少女……確か、サラだったつけ。うん。サラが俺のすぐ傍に近付いてきて、手を上げ……。

「……む、背が高いの……ほれ、少ししゃがめ

「あ、うん……」

とつあえず言われた通りに片膝だけを付き、頭をサラの少し下に下りながら今まで下げる。

するとサラは手を俺の額に当た……よつとして俺の顔を覗いてきた。

た。

「……ふむ、おぬし……もつと見てないのか?

「え、なにが?」

「む……少し傷つぐぞ。妾のような美少女がこんなに目の前にあるのだ。少しくらい赤面してもよいだろう」

……ちなみに今のサラとの顔の距離は20cm程だ。

「とは言われてもな……なんというか、慣れているというか……

元の世界じや、周りと違つて何故か女の子の友達が多かつたしな

……仁がその理由を知つてゐらしかつたから聞いたら、何故か呆れられたけど……。しかも教えてくれなかつた。

「ほひ、それは嫌みか？」

「え、いや、ナーフ？」

「そこらの女とよくこのよつたな距離で話しているのだひつ、慣れっこるとこ」（とほ、その内の誰かとキスもそれなりにしてこる、と）

「なんでそつなるー？ し、してないよー そんなの……」

「くく、[冗談じやむ]

……ヒドイ冗談だ。この人、仁より性格悪くないか？ あ、いや、別に仁が性格悪いってわけじゃないぞ？（毎度さりげなく馬鹿にしてくるナビ）

「では、始めよつかの」

と、セツヒトカリは再び俺の額に手を置いて、目を閉じた。

「なにをするんだ？」

「なに、刻印魔法の一種じやよ。情報を頭に記憶として書き込むだけじゃ

結構凄い気がするんだが……。

『つ……一?』

……？ どうしたんだ？

エクス、今なんか慌てたけど……。

と、サラの翳した手が光り始めた時……。

「つー?」「、これは……!?

「ん……? ビウしたんだ?」「

「い、いや……なんでもない。なんでもないのじや……」

なんだ……? ビウ見ても何かありますなんだが。

『ああ……しまつた。私が『ウタさんを訓練所に送り届けるべきでした……』

エクスもいつたいなんなんだ? よく聞き取れないけど……。

「つ……続きをこへべ?」

「あ、ああ……」

サラがそう言ひて、さらに光が強くなつたので俺は思わず目を瞑つた。

同時に、城全体の構図……地図のよつなものが、直接頭の中に入つてくる。

情報として。記憶として。俺は『理解』した。

「凄いな……仁も魔法使えるつて言つてたけど、今度見せて貰おつかな

「…………」

「……? さつきからビウしたんだ? なんか変だぞ

「なんでもない……なんでもないのじや……」

「うおつー?」

何故か頭を叩かれて、何故かサラが走つて逃げていってしまう。

……俺、なんか悪いことしたつけ……。

「んー……まあ今度謝ればいいか。そろそろ訓練に戻らないと怒られるしな」

……そりだ。

”俺が気にすることじやない”。

”勇者が気にすることじやないんだ”。

”勇者はただ、『えられた役目をこなすだけでいい”。

だから……”俺は何も知らなくていいんだ”。

＼ Side out ／

＼ Side · サラ · メルトフイリア ／

なんじや……なんなのじや、あれは……。

あの強力な『洗脳』の呪いは……！

見たこともない、聞いたこともない、強力な呪い……。

『自覚が出来ない』、非道で残酷な……しかも、きっと魔王です
ら解けない、複雑怪奇な『呪い』……洗脳の魔法。

あれが……あれが勇者に課した、この国の本質……？

ただ利用するためだけに呼び出され、捨てられるだけの『駒』……
？

「……王族や貴族の奴ら……なにやら焦臭いと思つておつたり、そ
うこいつわざじやつたのか……」

……ならば、初代勇者は？ 七代田勇者は？

……本当の歴史は…… 真実とは、いったいなんなのじや……。

「妾には……妾には何もわからぬ。……じゃが」

……じゃが、妾にも……妾にも、勇者とこいつ存在を生み出した
責任はある。

この国にてる限り。

勇者召還を詳しへ調べもせずに、ただ歴史を繰り返してきた、先
代の罪……。

10の程度で償ふられるとは思つてゐぬ。……それでも。

「妾が……『ウタの呪い』を解いてやりますとな……」

それがどんな結果に繋がってしまったとしても……それがこの国の
の、せめてもの償いとなろう。」

「…………知らぬといかぬな…………過去の、初代と七代目の真実を…………」

…………そうしてこの国が、また、呪われた勇者の歴史を繰り返すこ
とのなにこうにせぬとな…………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4834w/>

知らない天井だ……。

2011年10月31日16時48分発行